高岡市埋蔵文化財調査概報 第60冊

上牧野宮袋遺跡 調査概報

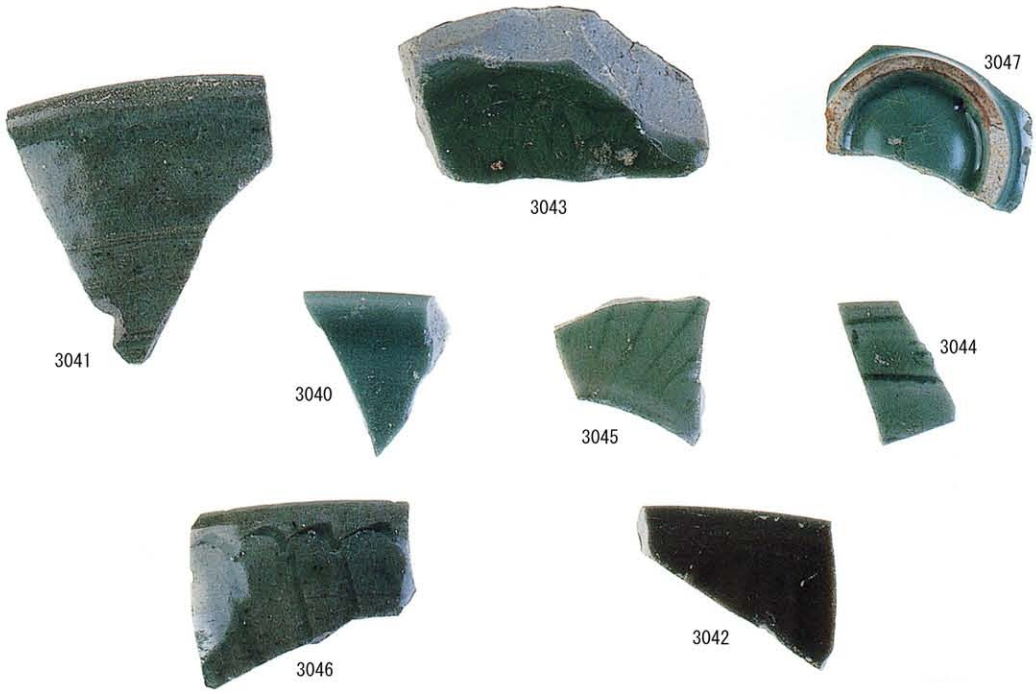
―― 平成13・14年度 県道姫野能町線の改良工事にともなう発掘調査 ――

２００５年 ３月

高岡市教育委員会

巻首図版 101．平成 13 年度調査区ＳＸ０６出土　瀬戸皿

巻首図版 102．平成 13 年度調査区ＳＸ０６出土　瀬戸皿



巻首図版 103．平成 13 年度調査区出土　青磁

巻首図版 104．平成 14 年度調査区出土　陶磁器類

高岡市埋蔵文化財調査概報 第60冊

上牧野宮袋遺跡 調査概報

―― 平成13・14年度 県道姫野能町線の改良工事にともなう発掘調査 ――

２００５年 ３月

高岡市教育委員会

序

高岡市域におきましては、旧石器時代から近世までの多くの埋蔵文化財包蔵地が所在しております。これらを鑑みるにつけ、当地の歴史の深さと、先人たちのつくりあげてきた尽力が思いおこされます。

本書に報告しますのは、県道姫野能町線の改良工事にともない平成13年度から14年度にかけて実施しました、上牧野宮袋遺跡の本発掘調査の成果です。

今回の調査におきましては、中世をはじめとする歴史的様相が確認されており、放生津潟の周辺に盛行した当該期の歴史の一端を垣間見る資料を得ることになったものと思われます。

本書にまとめた発掘調査の成果につきましては、当地の歴史を知る上でも貴重な資料になるものと思われます。学術調査や郷土の歴史研究などにも、お役立ていただければ幸いです。

末尾になりましたが、この調査にご協力いただきました、関係各位ならびに地元の皆様に、感謝の意を表します。

平成17年３月

高岡市教育委員会

教育長　　村井　和

例　言

1．本書は、富山県高岡市における埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。

2．本書は、高岡市上牧野宮袋遺跡における発掘調査の概要報告書である。

3．当該事業は、富山県高岡土木センターによる県道姫野能町線の改良工事に伴い、同センターから委託を受けて高岡市教育委員会が実施したものである。

4．屋外調査は平成13年度と14年度の２箇年度にわたって実施した。前者は平成13年７月29日から同年11月６日に実施し、後者は平成14年５月20日から７月10日に実施した。また、報告書の作成作業は平成16年度に行った。

5．調査関係者は次のとおりである。

課　長　　宮村勝博(平成13年度)
　　大石茂（平成14年度～）
課長補佐　　大石茂（～平成13年度）
　　天谷隆夫(～平成14年度)
主　幹　　天谷隆夫(～平成13年度)
副主幹　　本林弘吉(平成15年度～)
課　員　　山口辰一（～平成13年度）　根津明義　荒井隆　太田浩司

6．現地調査及び本書の執筆は根津が担当した。

7．本書の作成にあたっては、藤田慎一氏より指導・協力をいただいた。

8．本書においては下記の記号を用いて各遺構の種別をあらわした。ただし、混乱を避けるために13年度調査区と14年度調査区の各遺構については、通し番号をもって表記した。

ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＤ：溝状遺構　　ＳＫ：土坑　　ＳＺ：墓壙　　ＳＸ：畝状遺構

9．本書における各遺物番号は次のとおりである。

1001～須恵器,　2001～土師器,　3001～瓦質土器・陶磁器類,　4001～石製品,
5001～土製品　　6001～古墳土師器

【調査参加者】（五十音順，敬称略）

屋外調査

朝日達男　池田昌美　石田敏行　伊藤哲郎　伊藤宏　井上不二夫　岩瀬政顕　岩坪修三　大野章二　岡田一広　小川勉
沖村隆　桶谷潤　織田幸太郎　鏡武夫　角田豊　柏島大輔　黒田忠明　小林央　清水秀文　高岡信一　高嶋輝雄
竹内喜三　谷本昌夫　土屋正吉　津幡宗俊　中田郁子　中田俊男　新津敏夫　畠山行男　馬道弘一　藤井美紀
松本直典　安田武雄　吉田仲

室内整理調査

網英子　池田昌美　大橋佐和子　嶋幸美　菅野由美　田中美穂子　中田郁子　西野まり子　藤井美紀　藤田眞理子
南尚子　宮野美重子　村中理佳　矢木慶子　吉田栄子

高岡市埋蔵文化財調査概報 第60冊
上牧野宮袋遺跡 調査概報

目　　次

巻首図版
序
例言

序　章 1

第２章　平成13年度調査区 4

第３章　平成14年度調査区 19

第４章　結　語 27

写真図版

挿図目次

図１．上牧野宮袋遺跡の周辺地域における包蔵地の分布状況 2
図２．各調査区位置図 3
図３．上牧野宮袋遺跡・平成13年度調査区　全体図 5
図４．平成13年度調査区・１区全体図 7
図５．平成13年度調査区・２区全体図 9
図６．平成13年度調査区・３区全体図 11
図７．配石墓ＳＺ０１平面図 12
図８．平成13年度調査区・遺物実測図Ⅰ 15
図９．平成13年度調査区・遺物実測図Ⅱ 16
図10．平成13年度調査区・遺物実測図Ⅲ 17
図11．平成13年度調査区・遺物実測図Ⅳ 18
図12．上牧野宮袋遺跡・平成14年度調査区　全体図 20
図13．平成14年度調査区・遺物実測図 26

序　　章

上牧野宮袋遺跡及び周辺の歴史的環境

「上牧野宮袋遺跡」は、庄川右岸の標高１m程度の微高地上に位置する。遺跡の北方約２kmの地点には富山湾がひろがっており、中世において周辺地域の活動の中心的役割をになった放生津潟も、当遺跡の北方及び東方に所在したものと考えられている。概してこの地域では湿地帯が点在していたと考えられているが、包蔵地は集落を形成する環境の整う微高地上に分布する傾向にある。周辺にはすでに縄文時代以降の各時代の包蔵地が複数確認されている。現状では、これらに対する発掘調査歴はあまり行われていないため詳細は不明であるが、以下に特記すべきと思われる諸遺跡の概要や従来までの考察を簡潔に述べておくこととしたい。

まず、目下のところ、周辺地域において最古のものとなる可能性をもつ上牧野新庄川遺跡をあげておきたい。同遺跡については、かつて遺物採集地周辺をもって各遺跡名を冠していた経緯もあるが、平成６年度の分布調査の際にこの遺跡名に改めた経緯がある。縄文土器，須恵器，珠洲などといった土器・陶磁器類をはじめ、磨製石剣や石剣の採集もこれまでに報告されている〔富山県1972他〕。

また、間坂儀三郎氏の尽力によって採集された「牧野中学校所蔵遺物」についても特記しておきたい。この遺物は、現在の牧野中学校にながらく勤務していた同氏によって採集されたものである〔間坂1977他〕。平成６年度には高岡市教委により実測を掲載するほか、現状の編年観による再検討なども若干行われている。年代的には弥生時代の後期から古墳時代前葉までのものが圧倒数をしめるが、古代や中世の遺物も含まれる。中曽根遺跡・中曽根館遺跡・中曽根西遺跡の計３遺跡からの採集遺物とされている。

今回の開発行為にともない、上牧野宮袋遺跡とともに平成15年度に発掘調査を実施した中曽根西遺跡についても若干の言及をしておきたい。この遺跡は上牧野宮袋遺跡から東へ約60mの地点に位置する。主に弥生時代から古墳時代までの様相と中世を主体とするそれとが複合する遺跡である。従来までは分布調査の成果が考古学的知見の限界であったが、上記の発掘調査により多くの検出物がえられている。詳細については同遺跡の調査概報を参照されたい。

さて、上牧野宮袋遺跡についても、今回の発掘調査が最初の発掘調査であったため、従来まではあまり詳細は明らかではなかったが、はやくから古代瓦が採集され注目をされている〔富山県1972他〕。越中国においては越中国府関連遺跡をはじめ、いくつかの遺跡から古代瓦が出土しているが、この遺物は官衙的な様相にともなう可能性があるだけに、慎重かつ綿密な検討を行うべきと考える次第である。

なお、上牧野宮袋遺跡については、かつて「宮袋遺跡」と称していたが、平成６年度に実施した分布調査の際に現在の名称に変更している。また、この南方に現存する字名から、周辺を古代における射水郡の「川口郷」に比定する文献史学的考察もあることを付記しておきたい。

調査にいたる経緯及び調査経過

今回の調査は、富山県高岡土木センターによって一般県道姫野能町線の改良工事が計画され、平成12年に高岡市教育委員会へと埋蔵文化財にかかる照会を寄せてきたことに端を発する。

しかし、当該地については上牧野宮袋遺跡と中曽根西遺跡の包蔵地及びその近隣であったことから、事前に試掘調査を実施し、その保護にかかる措置を講ずる必要性が生じた。翌平成13年度にはこのことを受けて試掘調査が実施されたが、その結果、両遺跡とも多くの地点から出土遺物や遺構が検出され、これらの地点については、本調査を実施する必要性が浮上することとなった。

その後、高岡土木センターと高岡市教育委員会との間で再び埋蔵文化財保護にかかる対応を検討する場がもたれた

図1．上牧野宮袋遺跡の周辺地域における包蔵地の分布状況（『高岡市遺跡地図』2000より抜粋）

306 中曽根西遺跡　307 三日曽根遺跡　308 撲館塚遺跡　309 上牧野田島遺跡

310 上牧野宮袋遺跡　311 上牧野新庄川遺跡　312 下牧野新庄川遺跡

が、平成13年から４箇年をかけて両遺跡にかかる屋外発掘調査と報告書の作成を行うことで合意し、以下の表に記した計画に即して順次これに着手していった次第である。

年　度	概　　要	屋外調査期間	調査対象面積
平成13年度	上牧野宮袋遺跡の第１次発掘調査	平成16年3月8日～同年3月8日	2,310㎡
平成14年度	上牧野宮袋遺跡の第２次発掘調査	平成16年3月8日～同年3月8日	1,000㎡
平成15年度	中曽根西遺跡の発掘調査	平成16年3月8日～同年3月8日	6,200㎡
平成16年度	両遺跡の報告書作成	——	——

本書の構成

今回の開発行為にかかる調査は、遺跡にして２遺跡、調査地区及び調査実施年度にして計３分割をして実施した。本書においては２箇年度にわたって実施した上牧野宮袋遺跡の本発掘調査の概要を記載することとする。

ただし、平成13年度に実施した調査区を「第１次調査」と称し、翌年度のそれを「第２次調査」として、それぞれ個別に記述をすすめ、第４章でその総括を記すこととした。ただし、14年度調査区を「４区」及び「５区」で表現するほか、遺構番号や遺物番号などにおいても、本書においては13年度からの通し番号を付すことで統一している。また、中曽根西遺跡の調査概要については、別冊の『中曽根西遺跡調査報告』にまとめているので、詳細は同書を参照されたい。

図２．各調査区位置図

第２章　平成13年度調査区

調査区概観

上牧野宮袋遺跡は平成13年度から２箇年度を要して発掘調査を実施した。本章で解説をする13年度調査区はこのうちの2,310㎡である。検出遺構としては、配石墓ＳＺ０１をはじめ、溝状遺構や畝状遺構などといった遺構が検出されているほか、南方では土層の下降する地点が見受けられている。出土遺物については中世のものが主体をしめ、上記の遺構群も当該期に属するものが多いかと思われるが、この前後にあたる古代や近世の遺物も出土しており、周辺には当該期の様相も所在していた可能性がある。

主要検出遺構

土坑ＳＫ０１　１区の北端で検出されたやや楕円形を呈する土坑である。後世の削平により、すでに上部を消失している可能性があるが、現状では長径20cm・短径17cm・深さ４cmの規格を残存する。覆土は暗褐色土の単一層である。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ０２　１区の北端で検出された楕円形の平面を呈する土坑である。後世の削平により、すでに上部を消失している可能性があるが、現状では長径24cm・短径17cm・深さ６cmの規格を呈する。覆土は暗褐色土の単一層である。遺物は出土していない。

土坑ＳＫ０３　１区の北部で検出された不整楕円形の平面をもつ土坑である。後世において上面を削平された可能性があるが、現状では長径61cm・短径49cm・深さ11cmの規格を有する。覆土は暗褐色土の単一層である。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ０４　１区の中央からやや北に位置する径20cm前後・深さ６cmの規格を有する円形の土坑である。覆土は概ね暗褐色土を基本とするほぼ単一層であるが、黒褐色砂質土などが若干量混入する。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ０５　１区の中央からやや北に位置する不整楕円形の土坑である。すでに上部を消失している可能性があるが、当調査区にあっては比較的大型の土坑となる。長径65cm・短径56cm・深さ12cmの規格を呈する。覆土は概ね暗褐色土を基本とする単一層である。遺物の出土はない。

土坑ＳＫ０６　１区の中央やや北よりで検出された円形の土坑である。現状では長径94cm・短径83cm・深さ15cmの規格を呈する。覆土は概ね暗褐色土を基本とする単一層であるが、黒褐色砂質土や黄褐色砂質土なども若干量混入する。とくに遺物の出土はない。

土坑ＳＫ０７　１区の中央やや北よりで検出された不整形の土坑である。現状では長径60cm前後・短径50cm前後・深さ９cmの規格を呈する。覆土は暗褐色土の単一層である。とくに遺物は出土していない。ＳＺ０１などとともに墓地を形成していた可能性も検討をしたい。

土坑ＳＫ０８　１区の中央やや北よりで検出された不整形の土坑である。現状では長径62cm・短径58cm・深さ10cmの規格を呈する。覆土は概ね暗褐色土を基本とする単一層であるが、黒褐色砂質土や黄褐色砂質土なども若干量混入する。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ０９　１区の中央やや北よりで検出された径30cm前後・深さ４cmほどの円形の土坑である。覆土は暗褐色土の単一層である。その位置関係から周辺の遺構とともに畝状遺構を形成していた可能性もあるかと思わ

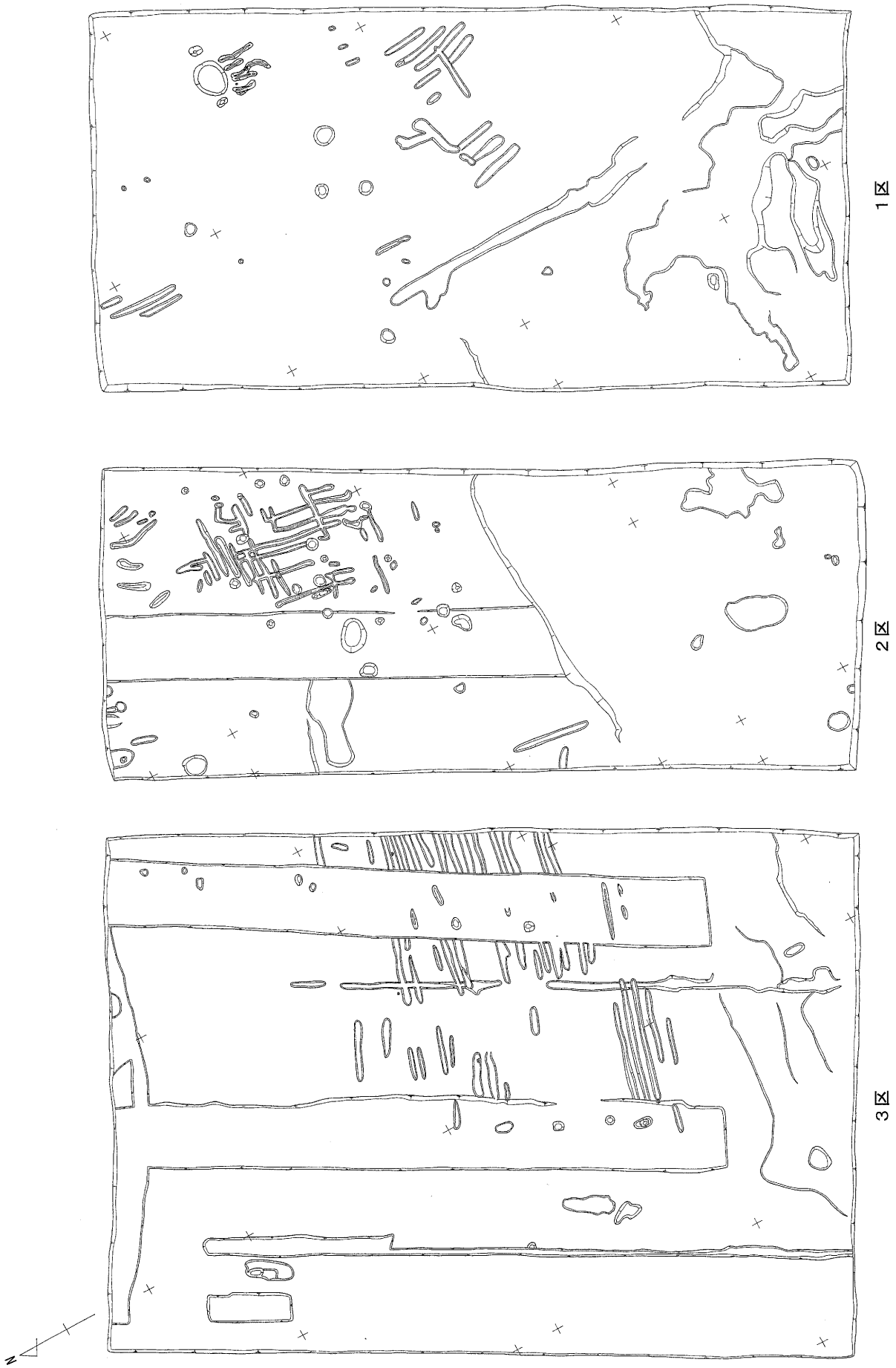


図３．上牧野宮袋遺跡・平成13年度調査区全体図（縮尺1/250）

れる。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ１１　２区の北西端付近で検出された土坑である。片側が調査区外に達するため全容は不明である。本址は最大長101cm・幅82cm・深さ４cmの外枠の中に、長径25cm・短径21cm・深さ３cmの方形のピットが所在する。双方とも覆土は暗褐色土を基本とし若干量の黒褐色砂質土などが混入する。ただし、上記のピットにはとくに柱痕なども検出されていない。12世紀後半代頃のものかと思われる土師器の灯明皿が出土している（図８－2017）。

土坑ＳＫ１２　２区の北西隅付近で検出されたやや不整円形の平面をもつ土坑である。現状では径100cm前後・深さ９cmの規格を呈するものとみられる。覆土は概ね暗褐色土を基本とするほぼ単一層であるが、黒褐色砂質土などが若干量混入する。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ１４　１区の中央よりやや北側で検出された径40cm前後の円形の土坑である。現状では４cmの深さをもつ。覆土は概ね暗褐色土を基本とするほぼ単一層であるが、黒褐色砂質土などが若干量混入する。遺物の出土はない。

土坑ＳＫ１８　２区の北側で検出された長径35cm・短径30cm・深さ13cmほどの円形呈する土坑である。覆土は暗褐色土の単一層である。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ２０　２区の北側で検出された長径45cm・短径35cm・深さ８cmほどの円形を呈する土坑である。覆土は概ね暗褐色土を基本とする単一層であるが、黒褐色砂質土や黄褐色砂質土なども若干量混入する。本祉については、西方に位置する畝状遺構の一角であった可能性もあるかと思われる。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ２１　２区の北側で検出された長径48cm・短径40cm・深さ７cmほどの円形を呈する土坑である。覆土は概ね暗褐色土を基本とする単一層であるが、黒褐色砂質土や黄褐色砂質土なども若干量混入する。とくに遺物は出土していない。上記のＳＫ２０と同様、周辺に位置する畝状遺構の一角であった可能性もあるかと思われる。

土坑ＳＫ２２　２区の中央から北側で検出された平面形が楕円を呈する土坑である。現状では長径46cm・短径41cm・深さ７cmの規格を呈する。覆土は概ね暗褐色土を基本とするほぼ単一層であるが、黒褐色砂質土などが若干量混入する。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ２３　２区の中央から北側で検出されたやや不整形な円形の土坑である。現状では長径46cm・短径40cm・深さ７cmの規格を呈する。覆土は概ね暗褐色土を基本とする単一層であるが、黒褐色砂質土や黄褐色砂質土なども若干量混入する。とくに遺物は出土していない。本祉は同様な覆土をもち、また規格的にも大差のないＳＫ２５や２７と直線状にならぶ位置関係にある。

土坑ＳＫ２４　２区の北側で検出された平面形が楕円形を呈する土坑である。現状では長径156cm・短径114cm・深さ10cmの規格を呈する。覆土は概ね暗褐色土を基本とする単一層であるが、黒褐色砂質土や黄褐色砂質土なども若干量混入する。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ２６　２区の北側で検出された径30cmほどの円形を呈する土坑である。遺構の深さは９cmをはかる。覆土は暗褐色土の単一層である。とくに遺物は出土していない。本祉は近隣に位置する畝状遺構の一角の延長線上に位置することから、上面を削平される以前の段階では、この畝状遺構の一部であった可能性もあるかと思われる。

土坑ＳＫ２８　２区の中央部からやや東側の地点で検出された方形の土坑である。現状では長径52cm・短径34cm・深さ11cmの規格を呈する。覆土は概ね暗褐色土を基本とする単一層であるが、黒褐色砂質土や黄褐色砂質土なども若干量混入する。とくに遺物は出土していない。

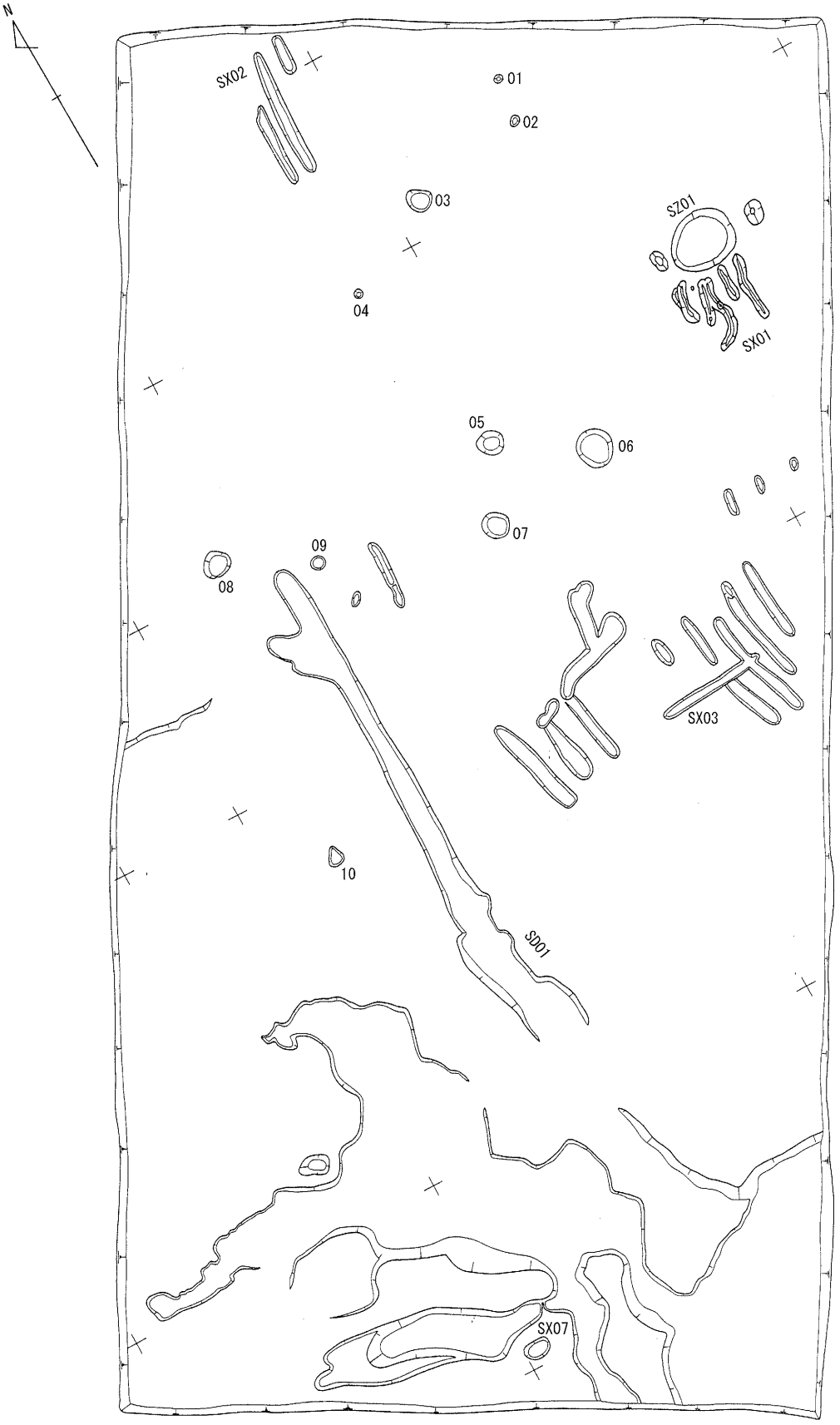


図４．平成13年度調査区・１区全体図（縮尺1/150）

※．土坑（ＳＫ）については、遺構番号のみを表記

土坑ＳＫ３０　２区の中央部付近から検出された不整形の土坑である。現状では長径81cm・短径61cm・深さ８cmの規格を呈する。覆土は概ね暗褐色土を基本とする単一層であるが、黒褐色砂質土や黄褐色砂質土なども若干量混入する。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ３４　２区の中央部付近から検出された不整方形の土坑である。現状では１辺55cm程度・深さ30cmの規格を呈する。覆土は概ね暗褐色土を基本とするほぼ単一層であるが、黒褐色砂質土などが若干量混入する。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ３５　２区の中央部付近から検出された不整形の土坑である。現状では全長92cm・幅54cm程度・深さ35cmの規格を呈する。覆土は概ね暗褐色土を基本とする単一層であるが、黒褐色砂質土や黄褐色砂質土なども若干量混入する。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ３６　２区の中央部付近から検出された径40cm前後・深さ19cmの規格を呈する不整形の土坑である。覆土は概ね暗褐色土を基本とする単一層であるが、黒褐色砂質土や黄褐色砂質土なども若干量混入する。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ３７　２区の中央部付近で検出された不整形の土坑である。現状では長径51cm・短径41cm・深さ５cmの規格を呈する。覆土は暗褐色土の単一層である。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ４２　２区の北西隅付近で検出された径50cm前後・深さ４cmの規格を呈する円形の土坑である。覆土は暗褐色土の単一層である。とくに遺物の出土はない。本祉はＳＫ４１と切り合っているが、新旧関係は不明である。

土坑ＳＫ４３　２区の北西隅付近で検出された遺構である。片側が調査区外に達していることから全容は不明であるが、現状で把握される最大径ないし最大幅は約50cmである。覆土は概ね暗褐色土を基本とするほぼ単一層であるが、黒褐色砂質土などが若干量混入する。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ４４　３区の北東隅付近で検出されたやや不整形を呈する径35cm前後・深さ18cmほどの規格を呈する土坑である。覆土は暗褐色土の単一層である。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ４５　３区の北東隅付近で検出された径30cm前後・深さ４cmほどの円形を呈する土坑である。覆土は概ね暗褐色土を基本とするほぼ単一層であるが、黒褐色砂質土などが若干量混入する。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ４６　３区の北東隅付近で検出されたやや不整方形を呈する土坑である。現状では長辺50cm程度・短辺30cm・深さ６cmの規格を呈する。覆土は暗褐色土の単一層である。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ４７　３区の北東付近で検出されたやや長楕円形を呈する土坑である。現状では長径48cm・短径32cm・深さ８cmの規格を呈する。覆土は概ね暗褐色土を基本とする単一層であるが、黒褐色砂質土や黄褐色砂質土なども若干量混入する。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ４８　３区の北東付近で検出されたやや不整円形を呈する土坑である。現状では長径38cm・短径32cm・深さ９cmの規格を呈する。覆土は概ね暗褐色土を基本とする単一層であるが、黒褐色砂質土や黄褐色砂質土なども若干量混入する。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ４９　３区の中央やや東側で検出された長楕円形を呈する土坑である。現状では長径52cm・短径40cm・深さ６cmの規格を呈する。覆土は暗褐色土の単一層である。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ５０　３区の中央やや東側で検出された、やや不整形ながらも一辺45cmほどの方形を呈する土坑である。覆土は暗褐色土の単一層である。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ５１　３区の中央付近で検出されたやや不整形の土坑である。現状では長径82cm・短径43cm・深さ４

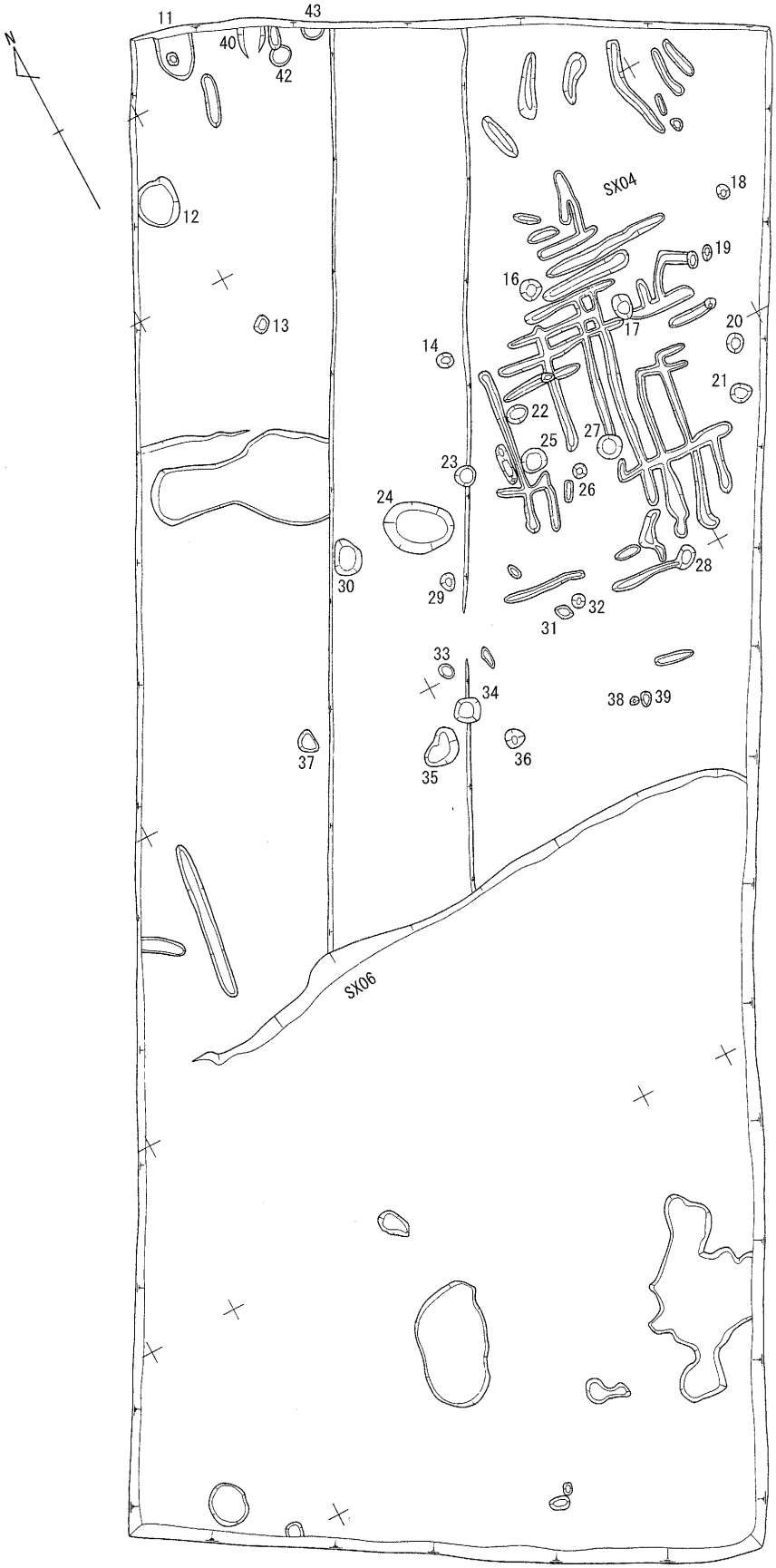


図５．平成13年度調査区・２区全体図（縮尺1/150）

※．土坑（ＳＫ）については、遺構番号のみを表記

cmの規格を呈する。覆土は概ね暗褐色土を基本とする単一層であるが、黒褐色砂質土なども若干量混入する。とくに遺物は出土していない。本祉のほか、ＳＫ５２・５３・５４の４基が南北方向に直線的にならぶ格好となる。

土坑ＳＫ５２　３区の中央やや南側で検出された長辺50cm・短辺43cmほどの方形の土坑である。覆土は暗褐色土の単一層である。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ５３　３区の中央からやや南側の地点で検出された径40cmほどの円形の土坑である。覆土は概ね暗褐色土を基本とする単一層であるが、黒褐色砂質土や黄褐色砂質土なども若干量混入する。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ５４　３区の南部で検出された長楕円形の外枠をもつ土坑である。この外枠は長径92cm・短径43cmの規格を有しているが、中央部には長径43cm・短径36cm程度・遺構確認面からの深さ17cmのピットが所在する。両者に明確な覆土の相違はなく、概ね暗褐色土を基本とする単一層である。上記もしたが、本祉をはじめＳＫ５２・５３・５４の４基が南北方向に直線的にならぶ格好となっている。

土坑ＳＫ５５　３区の南部で検出された不整形の土坑である。現状では最大長230cm・最大幅86cm・深さ５cmの規格を呈する。覆土は概ね暗褐色土を基本とする単一層であるが、黒褐色砂質土や黄褐色砂質土なども若干量混入する。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ５６　３区の南部で検出された不整形の土坑である。現状では最大長110cmほどを呈するが、本来的には並行する２基の溝状遺構であったものと思われる。覆土は概ね暗褐色土を基本とする単一層であるが、黒褐色砂質土や黄褐色砂質土なども若干量混入する。細片ながら図８に掲載した遺物番号2002の土師器の杯が出土している。

土坑ＳＫ５７　３区の北西付近で検出されたやや不整形な長楕円形の土坑である。現状では最大長210cm・最大幅85cm・遺構の確認面から同最深部までの深さ13cmの規格を呈する。覆土は概ね暗褐色土を基本とする単一層であるが、黒褐色砂質土や黄褐色砂質土なども若干量混入する。とくに遺物は出土していない。

溝状遺構ＳＤ０１　１区の中央から南側で検出された溝状遺構である。平面形は北端が概ね二股にわかれ、一方の南端は不明確となっているが、後世の削平を考慮するならば本祉はＳＸ０６へと連結するものとみられる。現状では全長19.30m・幅45cmから145cm・深さ４cmから12cmの規格を有する。覆土は概ね黒褐色砂質土を基本とする単一層であるが、一部に暗褐色土などが若干量混入する。年代不明の土師器が出土している。

配石墓ＳＺ０１　１区の中央よりやや東側の地点で検出された遺構である。後世の削平も及んでいると考えられるが、現状では長径170cm程度・短径135cm前後、深さは遺構確認面から15cm前後である。覆土の上部には詳細不明の珠洲ないし須恵器（図９－3017）や石臼（図11－4002）が川原石とともに配されている。覆土は暗褐色土をベースに黒褐色砂質土や灰色砂質土が斑状に混入する。本址は畝状遺構ＳＸ０１とほぼ南接するほか、東西には楕円形の土坑が所在する。上記したもの以外はとくに遺物の出土はない。

畝状遺構ＳＸ０２　１区の北隅で検出された畝状遺構である。後世の削平により多くを消失している可能性があるが、現状では３条の溝状遺構が確認されている。

方位については真北から東へ３度ほど傾くものとみられる。後世の削平等により個々の溝状遺構の全長は１mから3.2mまでの差異がみられるが、最大幅と遺構の深さについては、前者が25cmから33cm、後者が３cmから７cmまでと必ずしも大きな差異とはなっていない。覆土は概ね暗褐色土を基本とするほぼ単一層であるが、黒褐色砂質土などが若干量混入する。とくに遺物は出土していない。

図６．平成13年度調査区・３区全体図（縮尺1/150）

※．土坑（ＳＫ）については、遺構番号のみを表記。

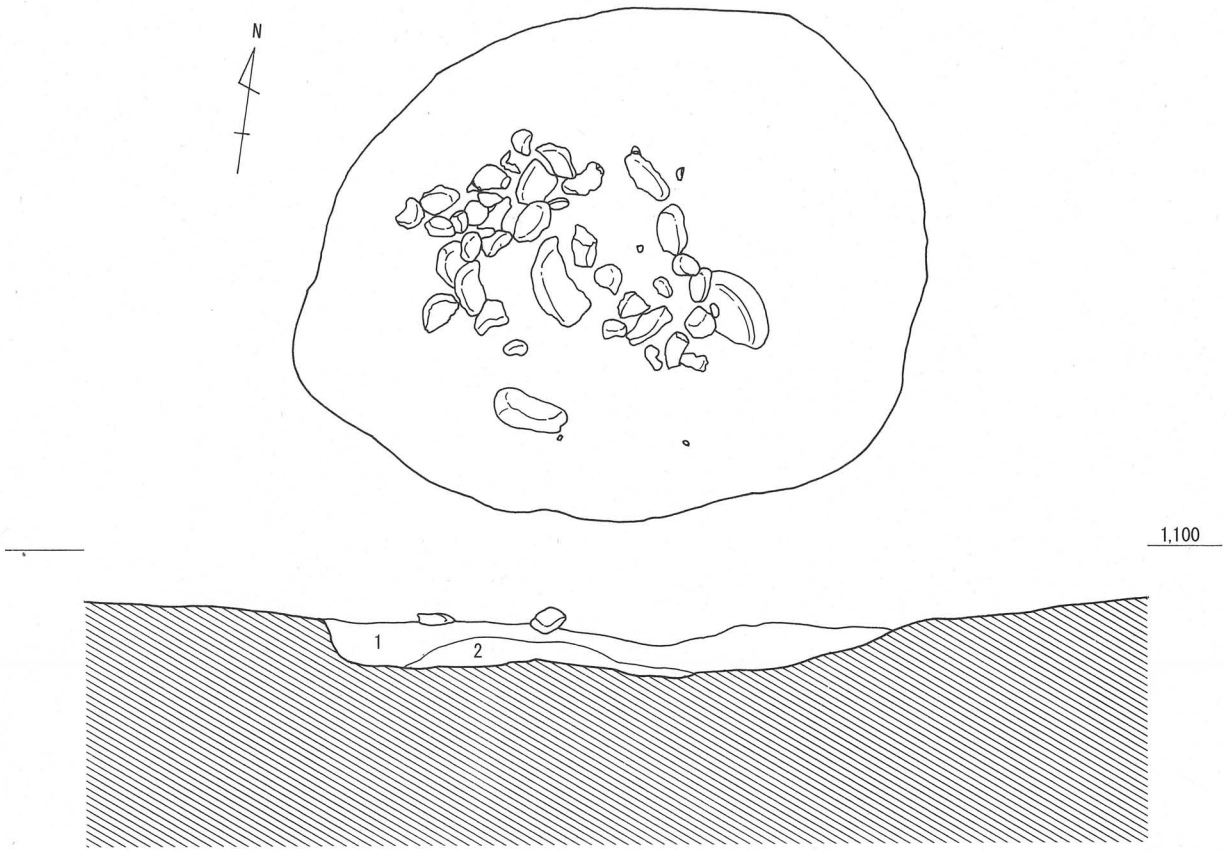


図７．配石墓ＳＺ０１平面図（遺構確認時）　　縮尺1/20

畝状遺構ＳＸ０３　　１区の中央東端から検出された畝状遺構群である。最大解釈としては16条ほどの溝状遺構で構成されているかにみえる。各溝状遺構の方位は南北方向を呈するものと東西方向にはしるものとに大別できるが、前者については真北から西へ４度ほど傾くものと20度ほど傾くものとに細分が可能である。後者についても同様に２類に細分が可能であるが、前者の２類と直角に交差するような傾きを呈することから、往時においては双方がセットをなしていたものと思われる。

後世の削平により個々の溝状遺構の規格にも相違がみられるが、全長については最大のものでも３ｍまで、最大幅は20cmから45cm、深さも２cmから８cmまでの規格が見受けられる。覆土は概ね暗褐色土を基本とするほぼ単一層であるが、黒褐色砂質土などが若干量混入する。とくに遺物は出土していない。

畝状遺構ＳＸ０４　　２区の北東部で検出された畝状遺構群である。最大解釈としては30条近い溝状遺構で構成されているものと思われる。方位のうえでは３類以上が所在するものと思われるが、土層観察のうえからはとくに新旧関係は把握できなかった。個々の溝状遺構の全長と幅には相違がみられるが、おそらくは後世の削平によるものと思われる。覆土は概ね暗褐色土を基本とするほぼ単一層であるが、黒褐色砂質土などが若干量混入する。その一角からは15世紀代の青磁の椀が出土している（図11－3046）。

畝状遺構ＳＸ０５　　３区の中央から東側にかけて検出された畝状遺構群である。後世の削平があったことを考慮するならば、周辺に位置する小規模遺構もかつては本址とセットをなしていた可能性があるかと思われ、

その総数はさらに多数にのぼると思われる。各溝状遺構の全長や最大幅などについては差異が見受けられる。方位については一部不明な部分があるものの概ね２類大別できるかと思われる。覆土は概ね暗褐色土を基本とする単一層であるが、黒褐色砂質土や黄褐色砂質土なども若干量混入する。遺物の出土はない。

畝状遺構ＳＸ０７　１区の中央部東端で検出された土坑である。長径66cm・短径44cm前後・遺構確認面からの深さは18cmをはかる。覆土には炭化物を多く含み、全体の色調もこの影響により黒褐色を呈するが、黄褐色砂質土や灰色砂質土なども若干量斑状に混入する。特に遺物は出土していない。

性格不明遺構ＳＸ０６　平成13年度の全区から検出されているものであり、遺構扱いをして本書に掲げるものである。遺構の内部はやや複雑な形状を呈するものの、全体としては南方に向かうにしたがって徐々に地形が下降していく形態をもっており、一案としては調査区外の南方に河川が所在しそれに伴うものである可能性などを掲げておきたい。

本祉からは図面11に掲載した遺物番号3027から3033までの16世紀前半代の瀬戸の灰釉皿が重なった状態で検出されている。また、各区の覆土中からは遺物番号2003・2009・2013・2019・3002・3049・3054（以上１区より出土）、2007・2011・3005・3009・3021・3042（以上２区）、4001（３区）などが出土している。

掘立柱建物ＳＢ０１　本祉は２区の北側に位置する遺構であり、最大解釈ながら掘立柱建物となる可能性があるものとして提示をするものである。構造的にはＳＫ１６・１７・２５・２７の４基の土坑で構成される１間×１間の側柱建物となる可能性があるかと考える。

掘方ないし柱穴となる上記各土坑の形状や、これらがつくりだす柱間については必ずしも一定していない。ＳＫ１６は径45cmほどのやや不整形な円形を呈し、遺構確認面からの深さは最大で16cmをはかるが、標高としては海抜61cmの地点に達している。ＳＫ１７は長径60cm・短径40cm・遺構確認面からの深さ17cmという規格を有する不整方形の平面をもつ土坑である。遺構確認面からの深さは最大で17cmほどであるが、標高的には海抜65cmの地点に達する。ＳＫ２５は１辺51cmほどのやや丸みを帯びた方形の土坑である。遺構確認面からの深さは現状で40cmが最大であるが、標高的には海抜60cmに達するため他の掘方ないし柱穴と大きな変化はない。ＳＫ２７は径55cmほどのやや円形ないし方形を呈する土坑である。遺構確認面からの深さは最大で30cmをはかるが、標高的には海抜60cmに達する。各土坑からは年代不明の土師器片が出土している。また、覆土については各土坑とも暗褐色土をベースに黒褐色砂質土などが若干量混入する。

主要出土遺物

須恵器（図８－1001～1007）　13年度調査区からは計７点に及ぶ須恵器の杯と杯蓋が出土している。いずれも細片であるため全貌などは不明であるが、年代的には概ね８世紀後半代から９世紀前半代までのものとみられる。全て表土層からの出土であり、出土地点も各地にひろがっている。

なお、図９に掲載した遺物番号3017については、後世の磨耗が著しく判別はつけ難かったが、本来は須恵器であった可能性もあるかと思われる。

土師器（図８－2001～2022・6001）　今回の調査区からは数十点に及ぶ土師器が出土している。一部を除き多くは表土層や後世の攪乱からの出土である。殆どが細片であるため実測も儘ならない状態であるため最大解釈を含むものの、年代的には概ね12世紀代くらいから16世紀代の杯・皿・椀といった食膳具のほか、１点のみではあるが古代の甕が出土している。

上記のうち、遺物番号2013から2021までは器面に煤等の付着がみられたことから灯明皿と判断した。2010から2012については赤彩が確認されている。6001としたものについては古墳時代の土師器ないし弥生後期頃の甕または壺の底部と思われる。こちらについても後世の磨耗等により調整法などは判然としない。

瓦質土器（図８－3001～3003）　今回の調査区からは数点の瓦質土器が出土している。いずれも細片であるが、確認される範囲ではすり鉢や火鉢などといった器種が見受けられる。遺物番号3001については14世紀後半台から15世紀代のものとみられる。

珠洲（図９及び10－3004～3026）　今回の調査区からは土師器と同様に数十点に及ぶ珠洲が出土している。殆どは甕ないし壺の胴部の細片であるが、大局的には吉岡編年のⅣ期からⅥ期の範囲におさまるかと思われる。図９及び10においては実測に値するもののみを掲載した。器種としては甕・壺・鉢・すり鉢などといったものが見受けられる。遺物番号3006には刻印がみとめられる。また3020には口縁部外面に墨書が書かれている。文字の内容については不明である。

なお、前述のように3017については須恵器であった可能性もあるかと思われる。

瀬戸（図11－3027～3039・3048～3051）　若干前記もしたが、調査区の南部に位置する性格不明遺構ＳＸ０６の一角からは、図11に掲載した3027から3033までの瀬戸の灰釉皿が出土している。これらは７枚が折り重なった状態で検出された。若干の型式的差異はあるものの概ね16世紀前半代のものとみられる。ちなみに、同一調査区（1区）からは3034から3039までの皿も出土している。また、3048から3051までのような13世紀後半代から14世紀代の椀や卸し皿も出土している。

青磁（図11－3040～3047）　調査区内の表土や攪乱層から数点の青磁が出土している。すべて細片であるため実測図についても再検討の余地がありうる。年代的には13世紀後半代から15世紀代のものが見受けられる。遺物番号3041は13世紀後半代から14世紀前半代の龍泉窯の椀である。3043も前記と同様の年代の椀である。こちらは内面に宝相華文がみられる。3046は口縁部の外面に連弁文を有する龍泉系の15世紀代の椀である。

その他陶磁器類（図11－3053～3056）　当調査区からは近世のほか、近現代の陶磁器類も多数出土している。以下では図11に掲載した５点について述べることとしたい。遺物番号3053と3054は唐津の皿である。前者は口縁部の上部を欠くが16世紀末から17世紀代のものとみられ、一方の3054は17世紀代のものとみられる。3052は15世紀後半代から16世紀前半の天目の椀である。3055及び3056はそれぞれ16世紀後半代と17世紀代の越中瀬戸の皿である。

土錘（図11－5001～5004）　当調査区からは４点の土錘が出土している。それぞれ表土層や攪乱層から出土したものであり、また出土地点も異なる。後世の磨耗を受けているが規格的な差異は本来的にはあまり顕著ではなかったものと思われる。

石臼（図11－4002）　配石墓ＳＺ０１の配石に転用されていた石臼である。現状では全体の約３割弱が残存しているのみである。復元形としては直径33cmから34cm程度・最大厚約７cm・現存する範囲での最小厚4.3cmほどのものになると思われる。石材は花崗岩である。おそらくは周辺で使用されていたものと思われる。

砥石（図11－4003）　当調査区からは１点だけ砥石が出土している。不整四角柱を呈していたと思われるが、剥落をした２面を除く４面が砥石として使用されたことが確認できる。石材は比較的硬質な砂岩である。

性格不明石製品（図８－4001）　平成13・14年の両調査区から１点ずつ同様な石製品が出土している。軟弱な砂岩が使用されているため現状では殆ど原型はとどめてはいないものと思われる。前記した中世の配石墓の存在などを鑑みるならば五輪塔の空風輪に比定することも一案に浮上するかと思われるが、具体的な性格論については再検討を要したい。

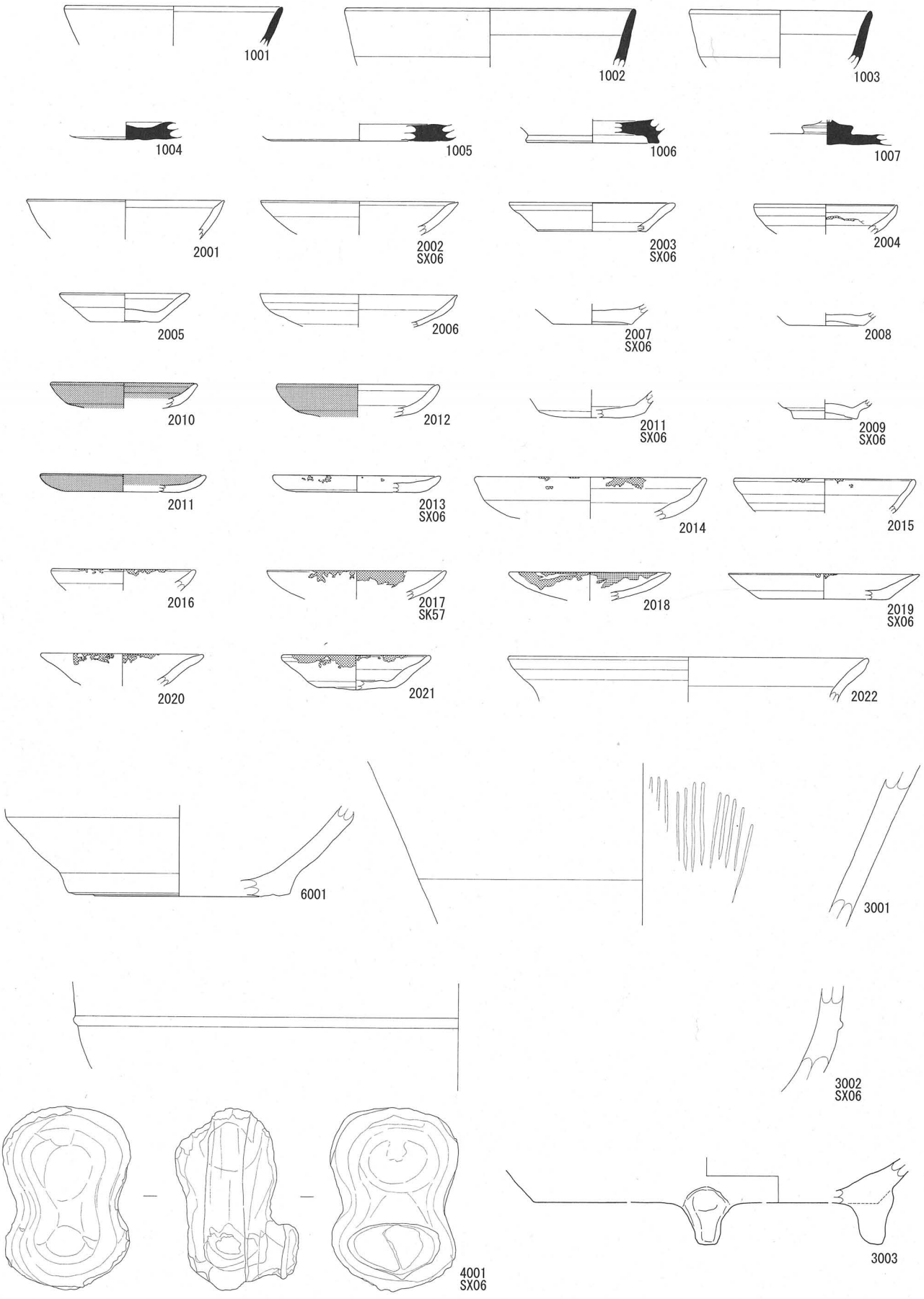


図８．平成13年度調査区・遺物実測図Ⅰ（須恵器・土師器・赤彩土器・灯明皿・瓦質土器・石製品）

石製品のみ縮尺1/4。他はすべて1/3。　遺構内の出土に限り出土地を併記。

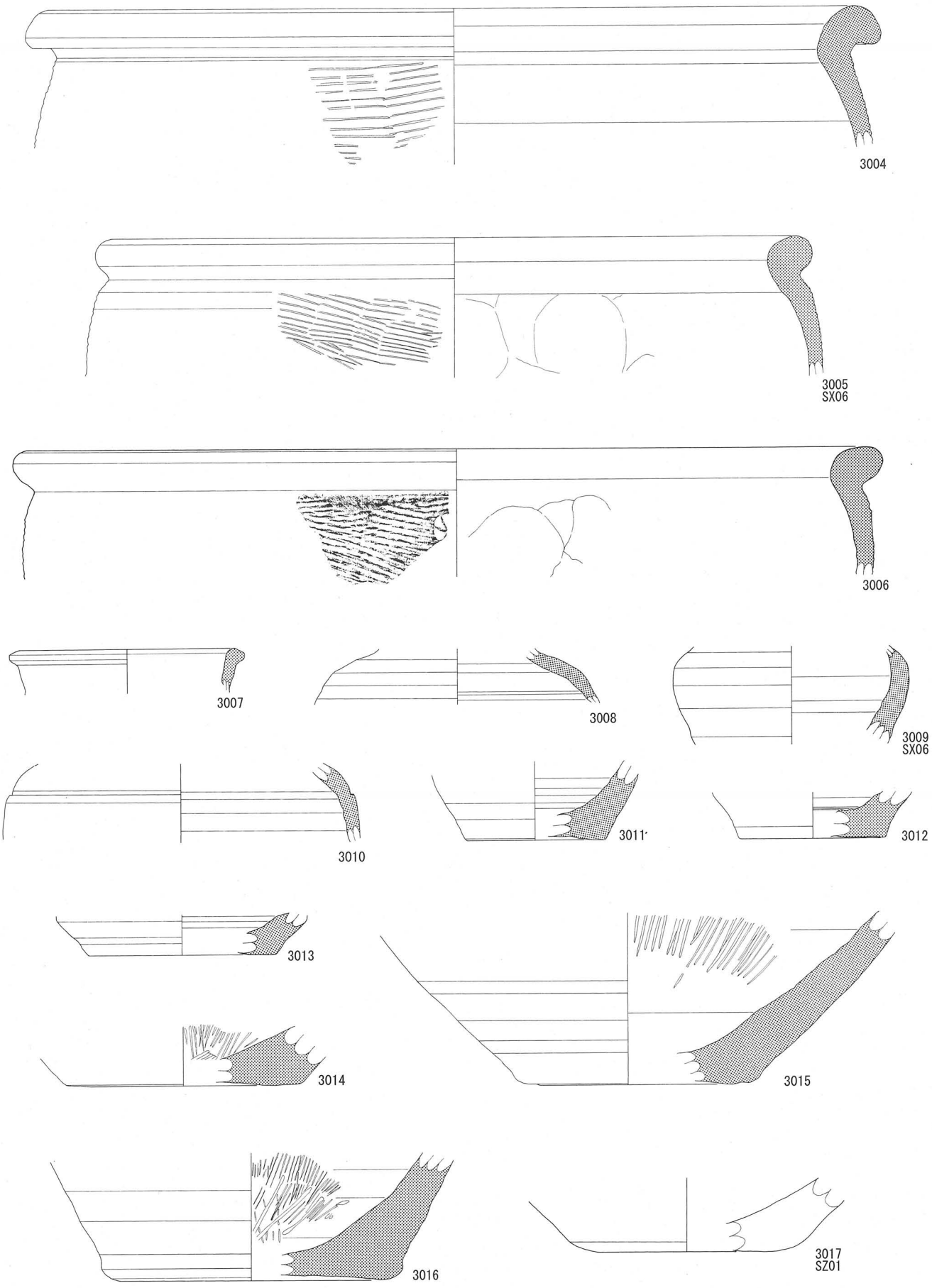


図９．平成13年度調査区・遺物実測図Ⅱ（珠洲）　縮尺1/3　遺構内の出土に限り出土地を併記。

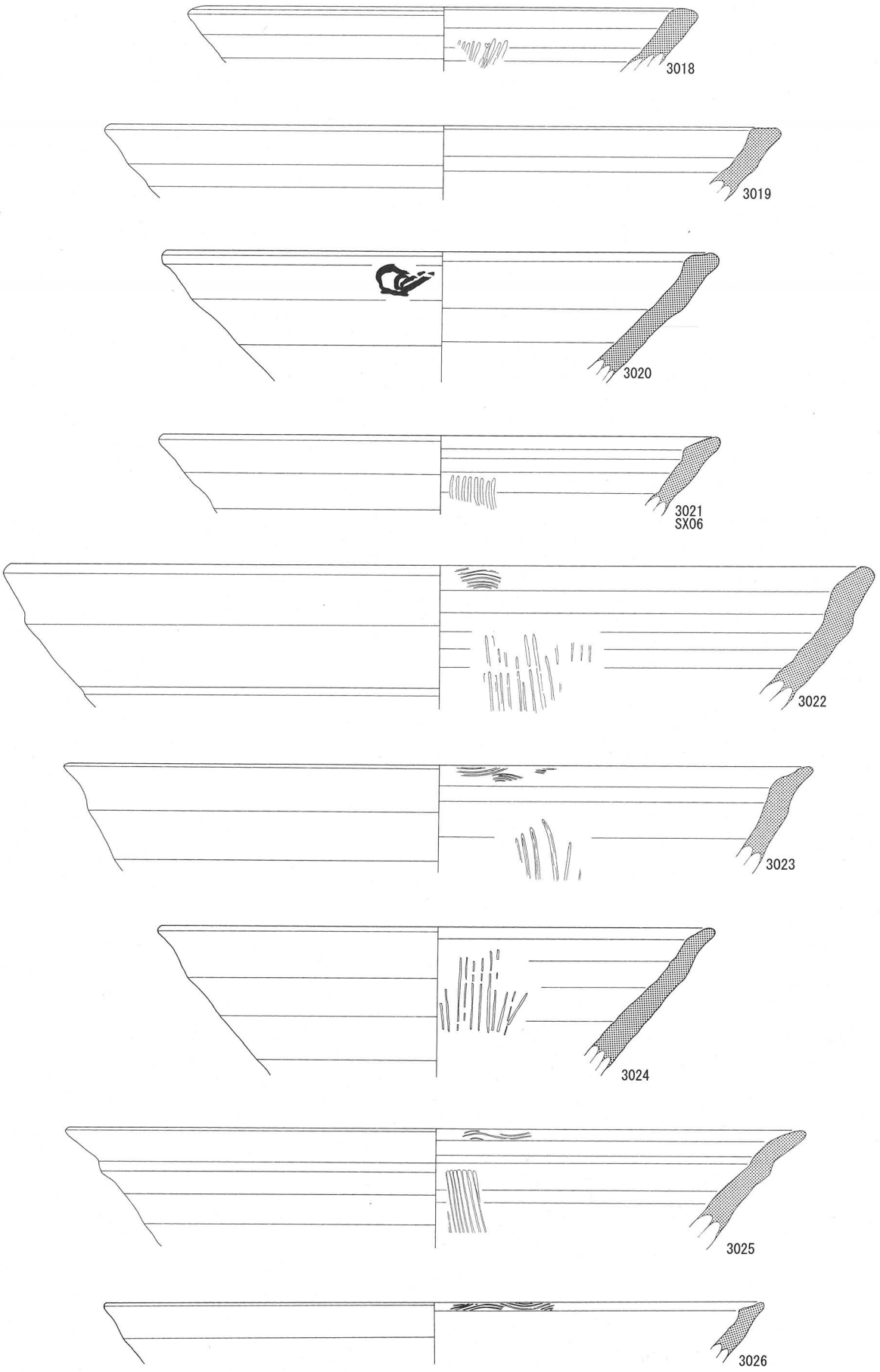


図10．平成13年度調査区・遺物実測図Ⅲ（珠洲）　縮尺1/3　遺構内の出土に限り出土地を併記。

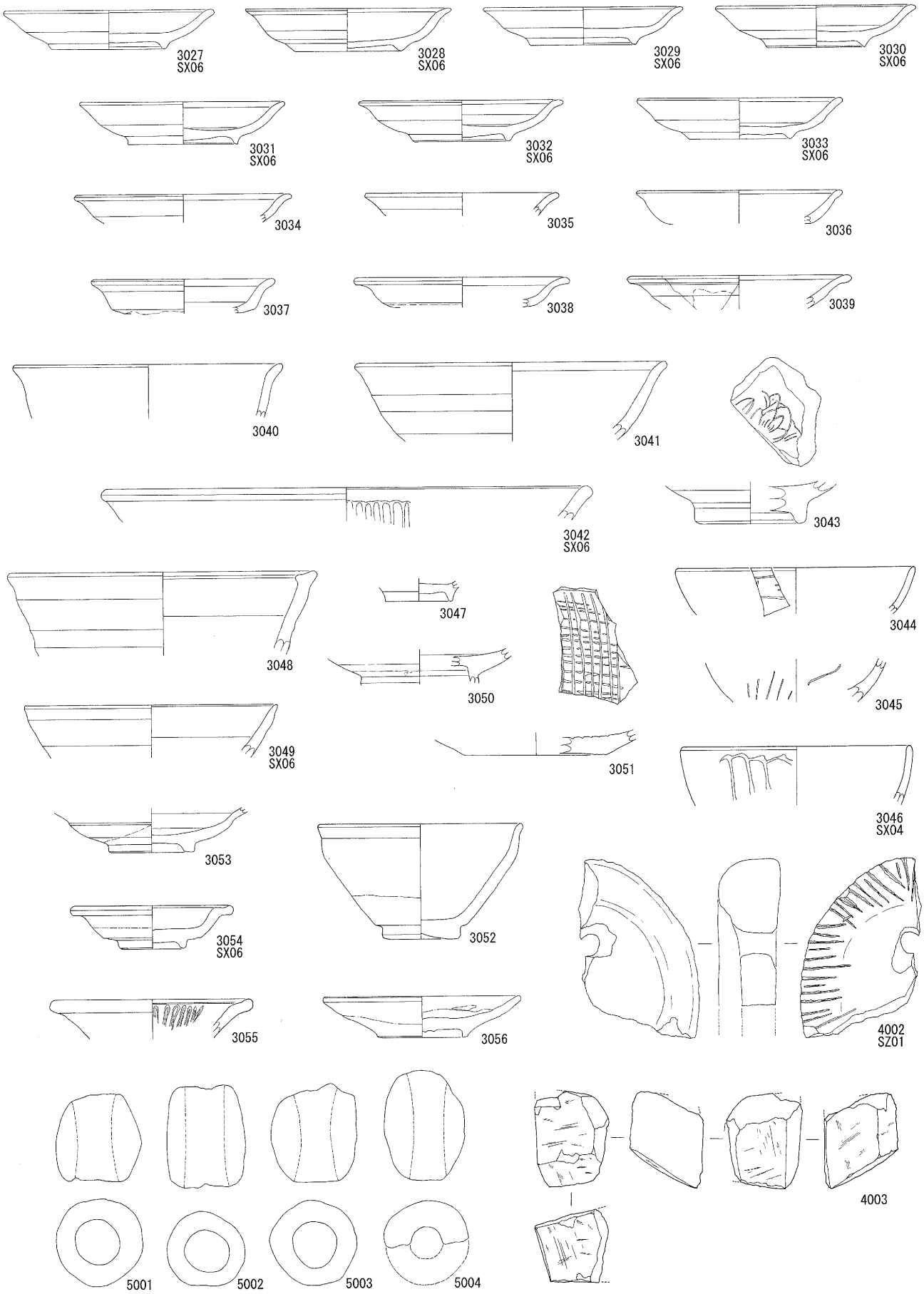


図11．平成13年度調査区・遺物実測図Ⅳ（瀬戸・青磁・唐津・天目・越中瀬戸・土錘・石臼・砥石・土錘）

石臼のみ縮尺1/6。他はすべて1/3。　遺構内の出土に限り出土地を併記。

第３章　平成14年度調査区

主要検出遺構

土坑ＳＫ５８　４区の東端で検出された、やや不整形な楕円を呈する土坑である。後世の削平により上部を消失している可能性があるが、現状では長径101cm・短径70cm前後・遺構確認面からの深さ20cmという規格を有する。覆土は灰褐色粘質土に若干の黄褐色粘質土が混入する単一層である。遺物の出土はない。

土坑ＳＫ５９　４区の東端で検出された、やや不整形な長楕円を呈する土坑である。現状では長径198cm・短径90～100cm程度・深さ24cmの規格を有する。黒褐色砂質土や灰色砂質土が斑状に混入する単一層である。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ６０　４区の東端で検出された不整円形を呈する土坑である。現状では長径92cm・短径80cm程度・確認面からの深さ30cmほどの規格を有する。覆土は灰褐色粘質土の単一層である。遺物の出土はない。

土坑ＳＫ６１　４区の東端付近で検出された円形の土坑である。二段に掘り込まれているが土層観察のうえから複数の遺構が切り合うものではないことが確認されている。遺構の外枠にあたる部分については径160～180cm程度・確認面からの深さ15cm程度の規格を有する。その内部にあるやや不整楕円形の落ち込みは径107cm・短径70cm程度・最大深20cmという規格を有する。覆土はともに灰色砂質土をベースに黒褐色砂質土や黄褐色砂質土が混入する単一層である。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ６２　４区の東端で検出された、やや不整な円形を呈する土坑である。現状では長径113cm・短径95センチ前後・確認面からの深さ20cmの規格を有する。覆土は灰色砂質土をベースに黒褐色砂質土や黄褐色砂質土が斑状に混入する単一層である。遺物の出土はない。

土坑ＳＫ６３　４区の東端で検出された、やや不整な円形を呈する土坑である。現状では長径102cm・短径82cm・確認面からの深さ16cmという規格を有する。覆土は黒褐色砂質土をベースに黄褐色砂質土や灰色砂質土が斑状に混入する単一層である。本址からは若干の骨片が検出されている。

土坑ＳＫ６４　４区の東部で検出された、やや不整円形を呈する土坑である。現状では長径80cm・短径64cm・確認面からの深さ22cmの規格を有する。覆土は黄褐色砂質土をベースに黒褐色砂質土や灰色砂質土が斑状に混入する単一層である。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ６５　４区の東部で検出された、やや不整な楕円形を呈する土坑である。現状では長径110cm・短径72cm・確認面からの深さ15cmの規格を有する。覆土は黄褐色砂質土をベースに黒褐色砂質土や灰色砂質土が斑状に混入する単一層である。遺物の出土はない。

土坑ＳＫ６６　４区の東部で検出された、不整円形を呈する土坑である。現状では長径113cm・短径80cm・確認面からの深さ13cmの規格を有する。覆土は暗灰褐色粘質土の単一層である。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ６７　４区の東部で検出された、径50cm前後の円形の土坑である。遺構確認面からの深さは10cmをはかる。覆土は黄褐色砂質土をベースに黒褐色砂質土や灰色砂質土が斑状に混入する。遺物の出土はない。

土坑ＳＫ６８　４区の東部で検出された不整円形を呈する土坑である。現状では長径150cm前後・短径80cm程度・確認面からの深さ15cmの規格を有する。覆土は暗灰褐色粘質土の単一層である。遺物の出土はない。

土坑ＳＫ６９　４区の東部で検出された不整形を呈する土坑である。現状では長径130cm程度・短径60cm程度・確認面からの深さ12cmの規格を有する。覆土は暗灰褐色粘質土の単一層である。遺物の出土はない。

土坑ＳＫ７０　４区の東部で検出された不整形を呈する土坑である。現状では長径108cm・短径80cm・確認面

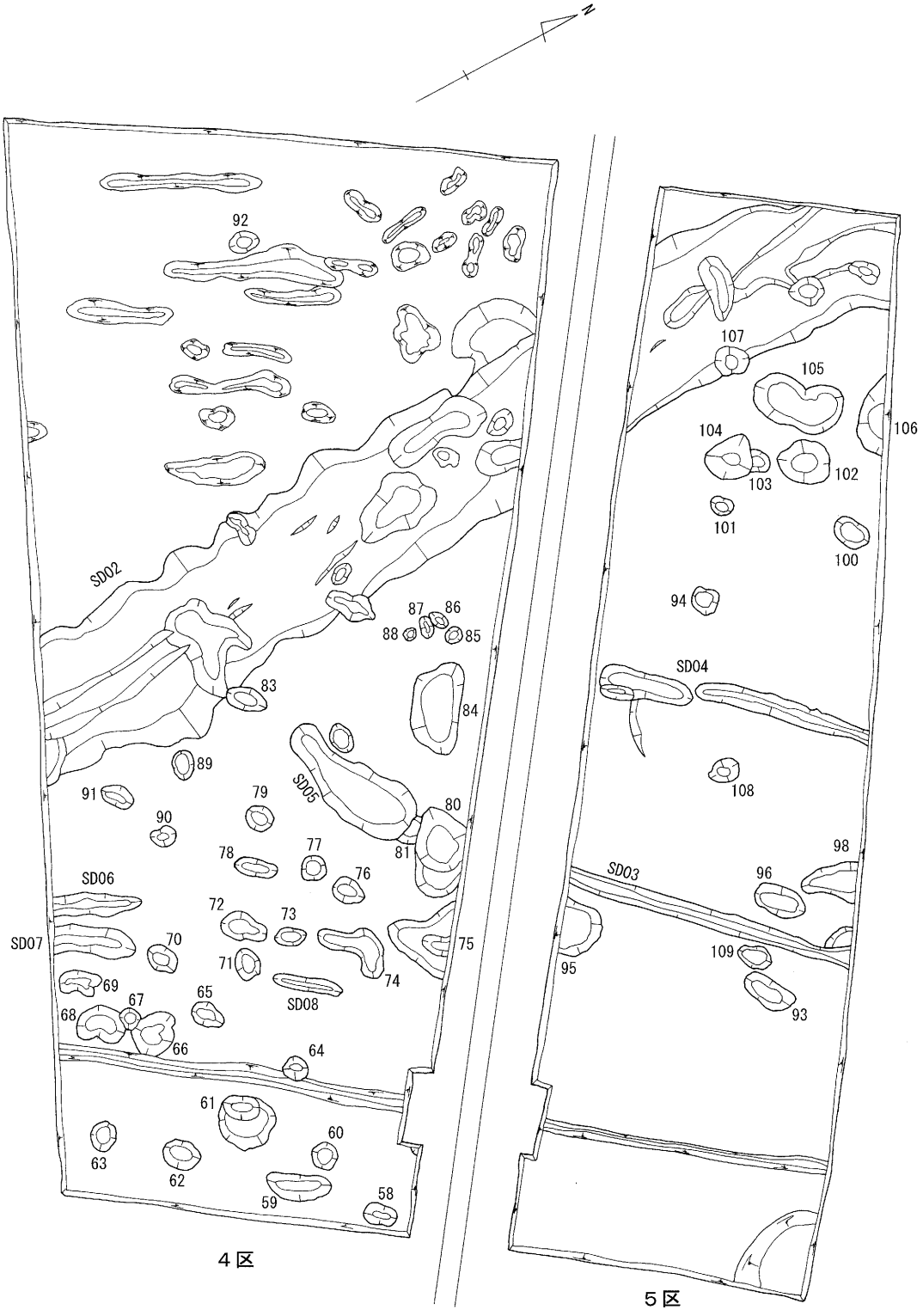


図12. 上牧野宮袋遺跡・平成14年度調査区 全体図　　(縮尺1/200)

※. 土坑（ＳＫ）については、遺構番号のみを表記。

からの深さ17cmの規格を有する。覆土は黒褐色砂質土と灰色砂質土などが斑状に混入する単一層である。とくに遺物の出土はない。

土坑ＳＫ７１　４区の東部で検出された、やや不整な方形を呈する土坑である。現状では長径97cm・短径78cm・確認面からの深さ24cmの規格を有する。覆土は灰色粘質土の単一層である。遺物の出土はない。

土坑ＳＫ７２　４区の東部で検出された、やや不整な円形を呈する土坑である。現状では長径150cm・短径50から100cmほど・確認面からの深さ40cmの規格を有する。覆土は灰色砂質土に黄褐色砂質土が混入する単一層である。遺物の出土がないため明言はできないが、後世におけるカクランの可能性もあるかと思われる。

土坑ＳＫ７４　４区の中央からやや東部の地点で検出された「く」の字状を呈する遺構である。現状では全長250cm程度・幅60～70cm程度・確認面からの深さ20cmほどの規格を有する。周辺の遺構とともに往時は溝状遺構を形成していた可能性もあるかと思われる。覆土は黄褐色砂質土を基本に黒褐色砂質土や灰色粘質土が斑状に混入する単一層である。炭化物のほか、性格不明の石製品（図13－4004）が出土している。

土坑ＳＫ７５　４区の東部の北側で検出された不整形の土坑である。片側が調査区外に達しているため全貌は不明である。確認される範囲では全長250cm程度・最大幅200cm程度・確認面からの深さ40cmを呈する。覆土は黒褐色砂質土をはじめ灰色砂質土や黄褐色砂質土などが斑状に混入する単一層である。とくに遺物は出土していないが、周辺の遺構とともに往時は溝状遺構を形成していた可能性もあるかと思われる。

土坑ＳＫ７６　４区の中央部から東部付近で検出された、やや不整な長楕円形の平面形をもつ土坑である。長径98cm・短径68cm・確認面からの深さ10cmの規格を有する。覆土は黒褐色砂質土をベースに黄褐色砂質土や灰色砂質土が斑状に混入する単一層である。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ７７　４区の中央部から東部付近で検出された楕円形の土坑である。長径107cm・短径68cm程度・確認面からの深さ15cm程度の規格を有する。覆土は青灰色砂質土をベースに灰褐色砂質土が斑状に少量混入する単一層である。とくに遺物の出土はない。

土坑ＳＫ７８　４区の中央部から東部付近で検出された楕円形の平面形をもつ土坑である。長径131cm・短径58cm程度・確認面からの深さ19cmの規格を有する。覆土は黒褐色砂質土をベースに黄褐色砂質土や灰色砂質土が斑状に混入する単一層である。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ７９　４区の中央部から東部付近で検出された径70cm前後・確認面からの深さ10cmの規格を有する平面形が円形の土坑である。覆土は黒褐色砂質土をベースに黄褐色砂質土が混入するかたちであるが、周囲に所在する土坑の覆土と構成要素は基本的に変わらない。ただし本址の覆土には若干の骨片が検出されている。

土坑ＳＫ８０　４区の中央部からやや東の地点で検出された不整形の土坑である。片側が調査区外に達しており全貌は不明である。確認される範囲では全長280cm・最大幅160cm・遺構確認面からの最大深32cmの規格を有する。遺物の出土はない。

本址は２基の土坑が切り合っている可能性もあるが、土層観察のうえからはそのことを把握できなかった。テラス部分もふくめ、覆土は青灰色砂質土をベースに黒褐色砂質土や灰色砂質土が斑状に混入する単一層である。遺物の出土はない。

土坑ＳＫ８１　４区の中央部からやや東の地点で検出された土坑である。ＳＫ８１及びＳＤ０５と切りあっているため全貌はつかめないが、確認される範囲では最大幅90cm・確認面からの深さ約20cmの規格を有する。覆土は黒褐色砂質土をベースに灰色砂質土が少量混入する単一層である。遺物の出土はない。

土坑ＳＫ８２　４区の中央部付近で検出された楕円形の平面をもつ土坑である。長径88cm・短径53cm・確認面からの深さ８cmの規格を有する。覆土は黄褐色砂質土をベースに黒褐色砂質土や灰色砂質土が斑状に少量混

入する単一層である。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ８３　４区の中央部付近で検出された楕円形の平面をもつ土坑である。長径134cm・短径70cm・確認面からの深さ22cmの規格を有する。覆土は黄褐色砂質土をベースに黒褐色砂質土や灰色砂質土が斑状に混入する。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ８４　４区の中央部の北側で検出された不整形の平面をもつ土坑である。長径291cm・短径156cm・確認面からの深さ最大30cmの規格を有する。覆土は灰褐色粘質土に若干の黄褐色粘質土が混入する単一層である。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ８５　前出のＳＫ８４の西方には４基の小土坑が密集している。最も北側に位置する本祉は径50cm前後・確認面からの深さ15cmほどの規格をもつ円形の土坑である。覆土は暗灰褐色粘質土の単一層である。とくに遺物は出土していない。本祉を含む４基の小土坑については、隣接する５区を含む周辺の遺構配置を勘案するに、往時は溝状遺構の一部であった可能性もあるかと思われる。

土坑ＳＫ８６　ＳＫ８４の西方において密集する４基の土坑のうちのひとつである。長径58cm・短径 42cm・確認面からの深さ18cmの規格を有する。覆土は暗灰褐色粘質土の単一層である。遺物の出土はない。

土坑ＳＫ８７　ＳＫ８４の西方に位置する土坑である。平面はやや不整形な長楕円形を呈する。長径71cm・短径32cm・確認面からの深さ15cmの規格を有する。覆土は暗灰褐色砂質土の単一層である。とくに遺物は出土していない。ＳＫ８６と近接しているが切り合いはない。

土坑ＳＫ８８　ＳＫ８４の西方において密集する４基の土坑のうちのひとつである。平面形は径40cm前後の円形で、遺構確認面からの深さ12cmという規格を有する。覆土は暗灰褐色砂質土の単一層であるが、とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ８９　４区の中央部付近で検出された楕円形の平面形をもつ土坑である。長径89cm・短径59cm・確認面からの深さ21cmという規格を有する。覆土は暗灰褐色砂質土の単一層である。とくに遺物の出土はない。

土坑ＳＫ９０　４区の中央部からやや東側の地点で検出された、若干不整形を呈する径80cm前後の円形の土坑である。遺構確認面からの深さは25cmをはかる。覆土は暗灰褐色砂質土の単一層である。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ９１　４区の中央部付近で検出された楕円形の平面形をもつ土坑である。長径97cm・短径70cm・確認面からの深さ14cmの規格を有する。覆土は灰褐色粘質土のほぼ単一層である。遺物の出土はない。

土坑ＳＫ９２　４区の西方で検出された不整形な円形の土坑である。現状では長径93cm・短径65cm・深さ19cmの規格を有する。覆土は黒褐色砂質土をベースに黄褐色砂質土や灰色砂質土が斑状に混入する単一層である。本祉はカクランの多く所在するＳＤ０２の西側にあって唯一検出された遺構である。遺物の出土はない。

土坑ＳＫ９３　５区の東部付近で検出された不整形な平面形を呈する土坑である。現状では長軸168cm・短軸70～90cm・深さ34cmの規格を有する。覆土は２層に分層される。上層は灰褐色粘質土をベースに黄褐色砂質土を斑状に含有する。下層は灰褐色粘質土を基本とするが帯状に黄褐色砂質土が混入する。遺物の出土はない。

土坑ＳＫ９４　５区の東部で検出された不整円形を呈する土坑である。現状では長軸110cm・短軸87cm・深さ20cmの規格を有する。覆土は暗灰褐色砂質土をベースに灰褐色粘質土を少量混入する。遺物の出土はない。

土坑ＳＫ９５　５区の中央から東部付近で検出された遺構である。片側が調査区外へと達しているため全貌は不明であるが、現状では最大長145cm・幅120程度cm・深さ32cmの規格を有することが確認されている。覆土は黄褐色の砂質土を若干含有する灰褐色粘質土である。近世の黄瀬戸（図13－3061）が出土している。

土坑ＳＫ９６　５区の東部付近で検出された不整円形を呈する土坑である。現状では長軸161cm・短軸98cm・深さ約12cmの規格を有する。覆土は灰色砂質土をベースに黒褐色砂質土や黄褐色砂質土が斑状に混入する単一層である。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ９７　５区の東部付近で検出された円形を呈するとみられる土坑である。ＳＤ０３と切り合うため全貌は明らかではない。覆土は暗灰褐色土の単一層である。とくに遺物は出土していない。また、ＳＤ０３との新旧関係についても不明である。

土坑ＳＫ９８　５区の中央から東部の付近で検出された不整円形を呈する土坑である。遺構の片側が調査区外へと達するため全貌は明らかではないが、現状では最大長196cm・最大幅132cm・深さ28cmの規格を有することが確認される。覆土は暗灰褐色砂質土の単一層であるが、とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ９９　５区の中央から西部の付近で検出された長軸70cm前後のやや不整形な方形を呈する土坑である。遺構の深さは確認面から11cmをはかる。覆土は黒褐色砂質土をベースに灰褐色砂質土や黄褐色土が斑状に混入する単一層である。遺物の出土はない。

土坑ＳＫ１００　５区の西部で検出されたやや不整形な楕円形を呈する土坑である。現状では長軸117cm・短軸90cm程度・深さ26cm程度の規格を有する。覆土は黒褐色砂質土をベースに黄褐色砂質土や灰色砂質土が斑状に混入する単一層である。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ１０１　５区の西部で検出された径60～70cm程度の不整円形を呈する土坑である。遺構の深さは確認面から21cmをはかる。覆土は暗灰褐色砂質土をベースに若干の灰褐色粘質土や黄褐色砂質土が混入する単一層である。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ１０２　５区の西部で検出されたやや不整形な円形の土坑である。長軸160cm・短軸150cm・深さ36cmの規格を有する。覆土はほぼ単一層であり、灰褐色粘質土をベースに黄褐色砂質土をブロック状に含有する。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ１０３　５区の西部で検出された遺構である。ＳＫ１０４切り合うため全貌は明らかではないが、現状では最大幅60cm程度・深さ15cmほどの規格を有することまでが確認されている。覆土は暗灰褐色砂質土に黄褐色砂質土が混入する単一層である。ＳＫ１０４との新旧関係は定かではない。遺物の出土はない。

土坑ＳＫ１０４　５区の西部で検出された不整円形の平面をもつ土坑である。現状では最大長102cm・深さ31cmをはかる。覆土は暗灰褐色砂質土に若干の黄褐色砂質土を混入する単一層である。上述したが、ＳＫ１０３との新旧関係は不明である。また、とくに遺物も出土していない。

土坑ＳＫ１０５　５区の西部で検出された土坑である。平面的には円形の土坑が２基重複しているようにも見えるが、とくに土層観察からは切り合いは検出されなかった。現状では最大長186cmをはかる。最大幅は北側では114cm・南側のそれで96cmをはかる。遺構の深さは北側が27cmであるのに対し、南側では20cmとやや相違がみられる。覆土は双方ともに暗灰褐色粘質土の単一層である。遺物はとくに出土していない。

土坑ＳＫ１０６　５区の西部で検出された土坑である。遺構の片側が調査区外へと達しているため全貌は不明であるが、現状では最大長168cm・深さ42cmを呈することが確認されている。

覆土は２層に分かれ、上層では褐色土を基本としながらも黄褐色粘質土のブロックを含有するが、一方の下層は灰褐色粘質土の単一層となっている。とくに遺物は出土していない。

土坑ＳＫ１０７　５区の西端付近で検出された径100cm前後の不整円形を呈する土坑である。遺構の深さは17cmをはかる。覆土は暗灰褐色砂質土に若干の黄褐色砂質土が混入する。ＳＤ０２と切り合うが新旧関係は不明である。とくに遺物は出土していない。

溝状遺構ＳＤ０２　４区と５区をまたぐ旧河川跡である。遺構の両端が調査区外へと達するため全貌は明らかではないが概ね正方位に近い方向にほぼ直線状にはしっている。遺構の規模は幅360cmから540cm・深さ９cmから18cmという規格を有している。覆土は暗灰褐色粘質土をベースとする単一層であるが、随所に暗灰褐色砂質土・黄褐色粘質土・灰褐色砂質土などを混入する。本址からは多種多様の遺物が出土している（図13参照）。このうち最新のものは17世紀代の越中瀬戸片であることから、少なくともこの時期以降に本祉が埋没したことが窺われる。

溝状遺構ＳＤ０３　５区の中央からやや東方の地点で検出された溝状遺構である。概ね北東から北西の方向に直線状にはしる。遺構は調査区外へと達するが、４区においてもＳＫ８０などの存在により所在が不明確となっている。現状では全長９ｍほどを確認している。遺構の幅は35cm～70cmを呈し、深さは11cm前後である。覆土は黄褐色砂質土をベースに黒褐色砂質土や灰色砂質土が斑状に混入する単一層である。ＳＫ９７と切り合うが新旧関係は明確ではない。とくに遺物は出土していない。

溝状遺構ＳＤ０４　５区の中央付近で検出された溝状遺構である。往時においてはＳＫ８５らと連結し、ＳＤ０２へと通じる溝状遺構であった可能性もあるかと思われる。遺構の幅は35cmから70cmを呈し、深さは８cmから16cmをはかる。覆土は灰褐色粘質土に黄褐色砂質土が混入する単一層である。遺物の出土はない。

溝状遺構ＳＤ０５　４区の中央からやや東側の地点に位置するやや不整形の溝状遺構である。周辺の遺構配置などを見渡すに、往時においてはＳＤ０２などと連結していた可能性があるかと思われる。ただし、本祉のみならず周囲の遺構は深く掘り込まれていることから、明確に連結していたか否かの判断は保留としたい。

本祉については概ね東西方向にならぶ２基の遺構が重複した状態で検出されたものであった可能性もあるかと思われる。それは遺構の平面形や深さが明確に相違することからも窺われるが、切り合いのあることが疑われた地点では、とくにそのことを裏付ける土層までは確認されなかった。

後世において上面を削平された可能性があるが、平面がくびれる所から北側の部分は現状で全長364cm・最大幅180cm・深さ34cmの規格を有する。一方の南側は全長96cm・最大幅99cm・深さ22cmの規格を有している。覆土は灰褐色粘質土の単一層である。とくに遺物は出土していない。

溝状遺構ＳＤ０６　４区の南東端で検出された溝状遺構である。現状においては片側が調査区外へと達するため規格は不明であるが、北東方向に位置するＳＫ７２・７３・７４などとともに、往時においては本区を横断する溝状遺構を形成していた可能性もあるかと思われる。

遺構の幅は先端部分をのぞき概ね60cmから70cm程度をはかり、深さは20cmから30cmを呈する。覆土は灰褐色粘質土に黄褐色砂質土が混入する単一層である。とくに遺物は出土していない。

溝状遺構ＳＤ０７　４区の南東端で検出された溝状遺構である。片側が調査区外へと達するため規格等は不明であるが、北東方向に位置するＳＫ７０・７１らとともに往時においては溝状遺構を形成していた可能性もあると思われる。遺構の幅は先端部分をのぞき概ね70cmから90cm程度をはかり、深さは25cmから30cm程度である。覆土は灰褐色粘質土に黄褐色砂質土が混入する単一層である。遺物の出土はない。

主要出土遺物

土師器（図13－2023～2031）　14年度調査区からは若干量の土師器が出土している。多くは細片であり且つ後世の磨耗が著しいため全容や調整法は判別しがたい。図13においては辛うじて実測にたるものを掲載した次

第であるが、確認される範囲においては年代的に12世紀代後半代から13世紀前半期を中心とするものと、15世紀後半期から16世紀代までのものとの２群に分類できるかと思われる。

同図に示したとおり、遺構内からの出土も若干数ある。上記の図に掲載したもののうち2025・2028・2031については、口縁部付近に煤の付着のあったことから灯明皿として使用されていたものと考えられる。

青磁（図13－3057～3060）　当調査区からも数点ではあるが青磁が出土している。図13では４点を掲載したが、いずれも細片であるため口径や口縁部の傾きなどについては再検討の余地が残されるものがある。遺物番号3057については13世紀後半代から14世紀前半代の椀である。口縁部の外面に連弁文が施されている。3058も前記とほぼ同年代の椀である。同様に口縁部外面に連弁文が施されているが内面の底部付近には圏線がある。また、3059と3060については15世紀代頃の椀である。

白磁（図13－3063～3064）　当調査区からは２点だけ白磁が出土している。いずれも細片であるため径や口縁部の傾きなど実測図には再検討の余地も残される。遺物番号3063については概ね13世紀代のものと見受けられる。一方の3064は13世紀後半代から14世紀前半代のものとみられる。

瀬戸（図13－3061・3066）　14年度調査区からは数点の瀬戸が出土している。図13では実測を敢行した計２点を掲載した。このうち遺物番号3061は黄瀬戸である。底部から高台の部分を残存させるのみであるが、概ね近世のものと思われる。一方の3066は14世紀代頃の盤である。細片であるため口径については再検討の余地もあるかと思われる。

瓷器系陶器（図13－3065・3067）　14年度調査区からは瓷器系の陶器が出土している。遺物番号3065は底部削り出しの椀ないし皿になるとみられる。底部付近を少量残すのみであるが、底外面には糸切り痕が残されている。胎土は比較的白色を呈しており類例的に東濃のものと類似する。10世紀後半から11世紀前半頃のものと想定しておきたい。一方の3067は底部から高台の一部が残存するものである。比較的高い高台を有するという特徴などを総合的に鑑み、ここでは11世紀代を中心とする年代観を提起しておきたい。

越中瀬戸（図13－3068～3069）　当調査区からは数点の越中瀬戸も出土している。いずれも細片であるうえに年代的にも近世以降のものが主体を占めるが、図13では辛うじて実測にたる２点を掲載した。遺物番号3068は底部を欠き、3069は逆に口縁部を欠くが、いずれも17世紀代のものとみられる。

瀬戸美濃（図13－3070）　14年度調査区に該当する試掘調査区から出土した瀬戸美濃の天目の椀である。底部付近を欠くが年代的には17世紀代のものと見受けられる。

珠洲（図13－3071～3072）　当調査区からも珠洲が出土しており、全出土遺物のうち最も多くの出土量を数える。大半は甕の胴部片であり、全容や年代などを把握するのは困難である。確認される範囲では吉岡編年におけるⅣ期からⅤ期頃のものが多いかと思われ、13年度調査区とも大局的に変化はないものと思われる。

性格不明石製品（図13－4004～4005）　当調査区からは性格不明の石製品が２点出土している。遺物番号4004はＳＫ７４の覆土内から出土したものであるが、状況的にみて流れ込みの可能性が高いと思われる。

ちなみに、13年度調査区でも同様のものが検出されているが、非常に軟弱な砂岩を使用しているため現状では往時の姿を想定し難い。周辺において骨片が散見されているほか、一定の拡大解釈を擁するならば五輪塔の空風輪とも形状が類する可能性を有するかと思われるが、具体的な性格論については別途再検討を要したい。

一方の4005は表土層から出土したものである。全体の形状は不明であるが、一部に表面を平坦状に整形し、且つ鈍角に仕上げるという加工痕が見受けられる。平坦状に整形された部分は２面ほど残存するが、状況的にみて砥石と考えることはできない。もっとも、鈍角に整形されている点を考慮するならば地輪と考えることもやや困難である。また、石材も比較的強固な砂岩を使用しているため、上記した石製品とも相違している。

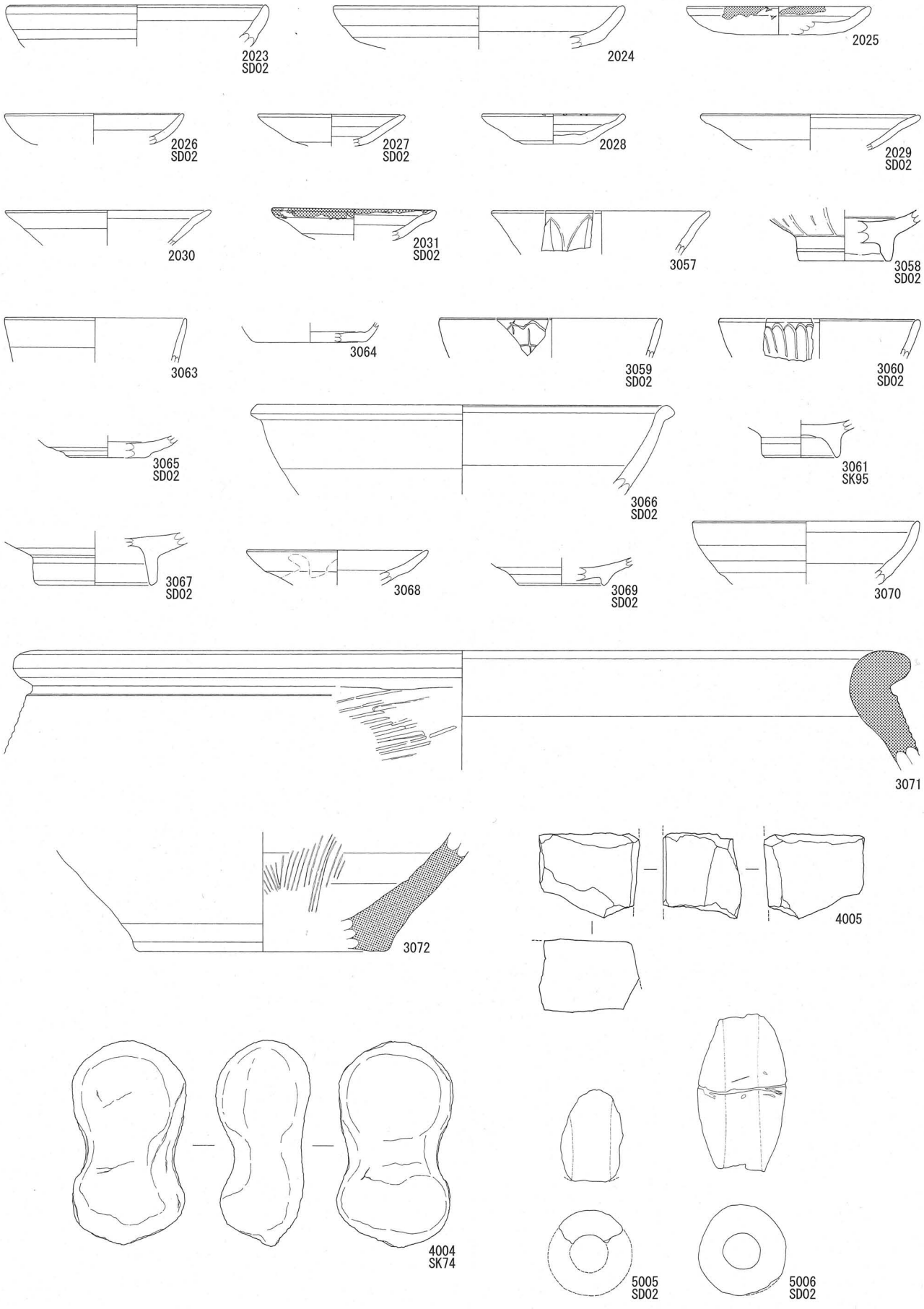


図13. 平成14年度調査区・遺物実測図（土師器・灯明皿・青磁・白磁・瀬戸・越中瀬戸・珠洲ほか）

石製品4004のみ縮尺1/4。他はすべて1/3。　遺構内の出土に限り出土地を併記。

土錘（図13－5005～5006）　当調査区からは土錘が２点出土している。遺物番号5005は後世の破損により全容を把握することができないが、5006と孔の規格に大きな差異はない。5006においては器面の中央付近に孔とは異なる方向の溝がつくられている。この溝は焼成後に施されたものであるが、一案としては縄掛けなどの用途を提起しておきたい。

第４章　結　語

上牧野宮袋遺跡は、はやくからその存在が知られていたものの、未調査であったことからその内容については不明な点が多かったものである。今回の調査により、少なくともこの調査区周辺においては古代・中世・近世の各時代の歴史的様相が所在した可能性が高まった。出土遺物の年代を俯瞰するに、いまのところこれらは断続的な存続を呈した可能性がある。中心となるのは12世紀後半頃から16世紀末頃までの中世を主体とする様相であり、当該期における放生津潟周辺を舞台とする様相と関連するものと思われる。

今回検出された遺構を概観するに、主には周辺の自然環境への対策を講じて生活圏を確保していたことが窺われる。畝状遺構の点在する傾向からは当該地周辺では畑作も行われていたことが窺われるが、配石墓などの存在からは墓地的な様相も呈していた可能性が窺われる。概して官衙的なものや周辺地域に対する中核的な様相までは検出されていないと思われるが、当該期における周辺の生活様式を反映する可能性をもつものとして注目をしておくべきと思われる。

前述したが、上牧野宮袋遺跡の所在する牧野地区の周辺地域では、中世における放生津潟周辺を中心とする歴史的様相が常に注目をあつめてきた経緯がある。今回の発掘調査によって得られた成果は必ずしも具体的なものばかりではなかったが、今後における当該地域に対する歴史研究への橋渡しをするという意味では、画期的な調査になったものと思われる。したがって、今後もこうした調査を地道に重ねて周辺地域の歴史をひもとく作業の継続を提起したい。そして、ひとたび破壊を受けた暁には二度と再生されることのない文化財の保護を強く提起する次第である。

【引用参考文献】

高岡市教育委員会　『高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅵ ― 平成6年度，牧野・能町地区の遺跡分布調査 ― 』1995

高岡市教育委員会　「中曾根遺跡、得能地区」『市内遺跡調査概報Ⅳ
― 平成７年度，石堤長光寺遺跡・石塚遺跡・中曽根遺跡の調査 ― 』1996

富山県　『富山県史 考古編』1972

西井龍儀　「上牧野宮袋遺跡・中曽根西遺跡・白石遺跡」
『北陸の古代寺院 その源流と古瓦 』北陸古瓦研究会編　桂書房　1987

北陸中世土器研究会編　『中・近世の北陸　考古学が語る社会史』桂書房 1997

間坂儀三郎　『放生津潟周辺の地学的研究』富山地学会・第一港湾建設局伏木富山港工事事務所編　1966

間坂儀三郎　「牧野の今昔史」『牧野小学校百年史』高岡市立牧野小学校編 1977

吉岡康暢　『中世須恵器の研究』吉川弘文館 1994

写　真　図　版

図版 101．平成 13 年度調査区全景

図版 102．13 年度調査区全景（西方より）

図版 103．13 年度調査区全景（東方より）

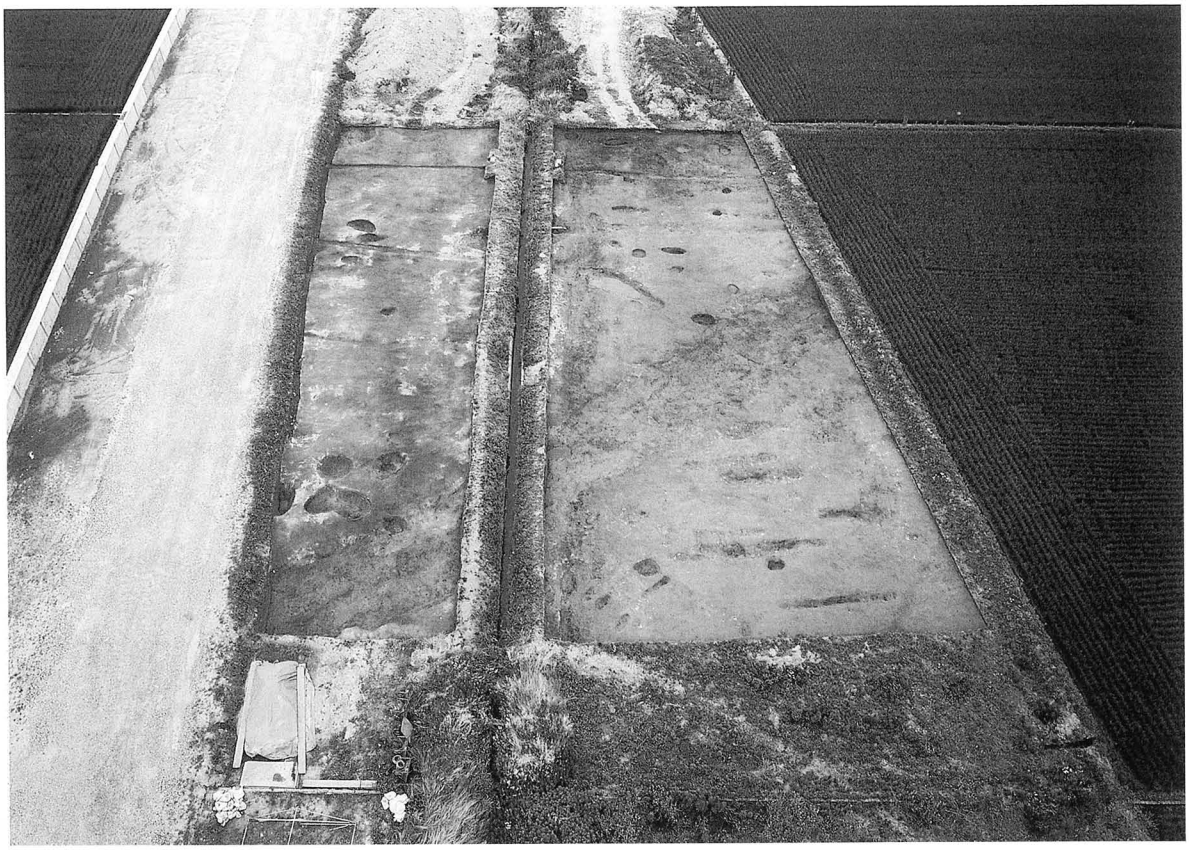
図版 104．13 年度調査区 1 区・配石墓ＳＺ０１（南方より）

図版 105．13 年度調査区 1 区・配石墓ＳＺ０１完掘状況（南方より）

図版 106．13 年度調査区 2 区・掘立柱建物ＳＢ０１ほか（東方より）

図版 107．13 年度調査区 2 区・畝状遺構ＳＸ０４ほか（南方より）

図版 201．平成 14 年度調査区全景　　※北側拡張区を除く



図版 202．14 年度調査区全景（西方より）　※北側拡張区を除く

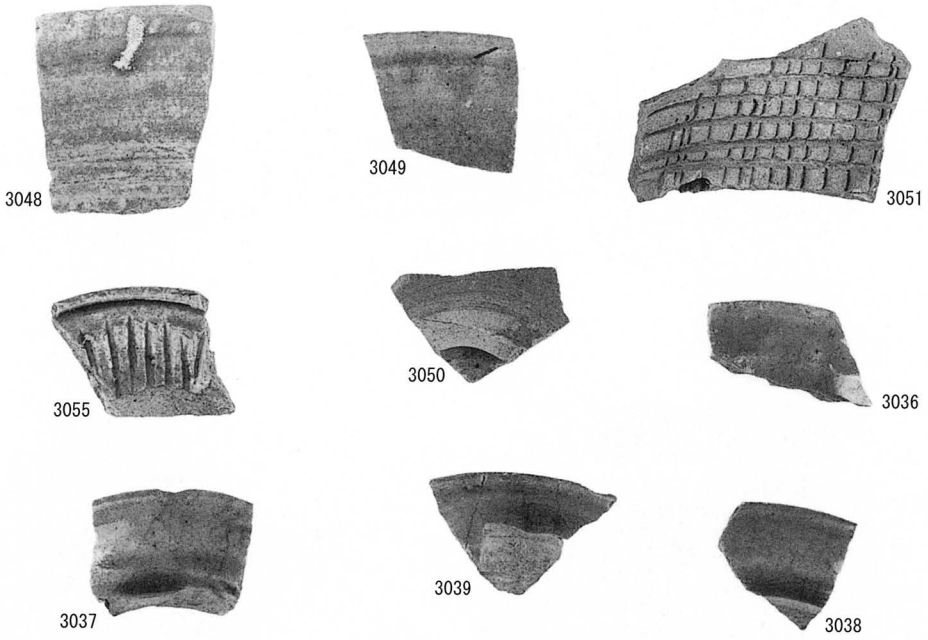
図版 203．14 年度調査区 5 区北側（拡張区）全景（西方より）

図版 204．14 年度調査区 4 区・土坑群（東方より）

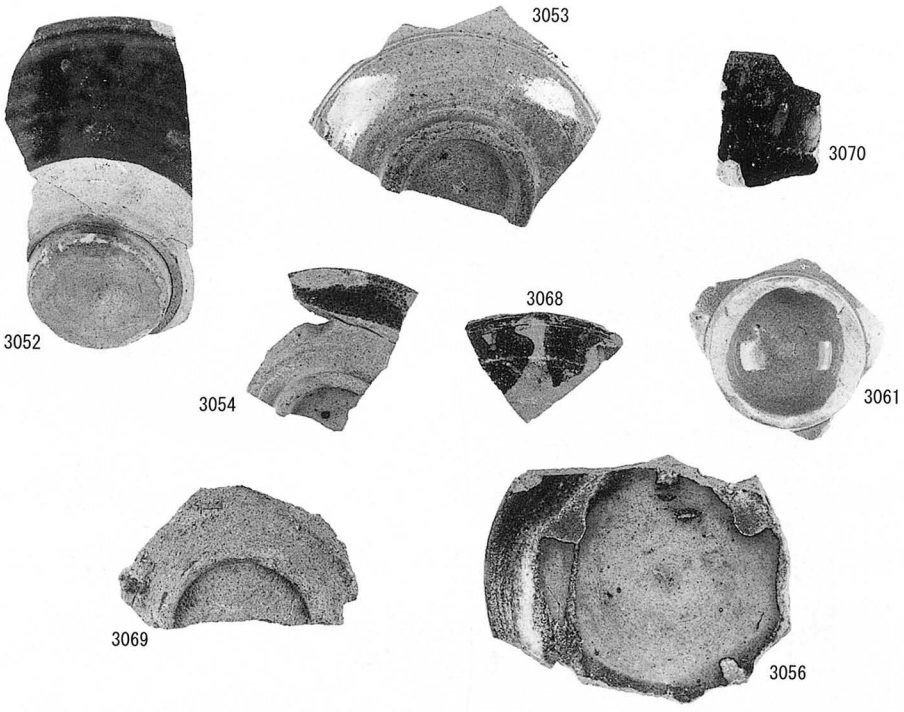
図版 205．14 年度調査区 4 区・土坑群（北方より）

図版 206．14 年度調査区 4 区・河川跡ＳＤ０２（北方より）

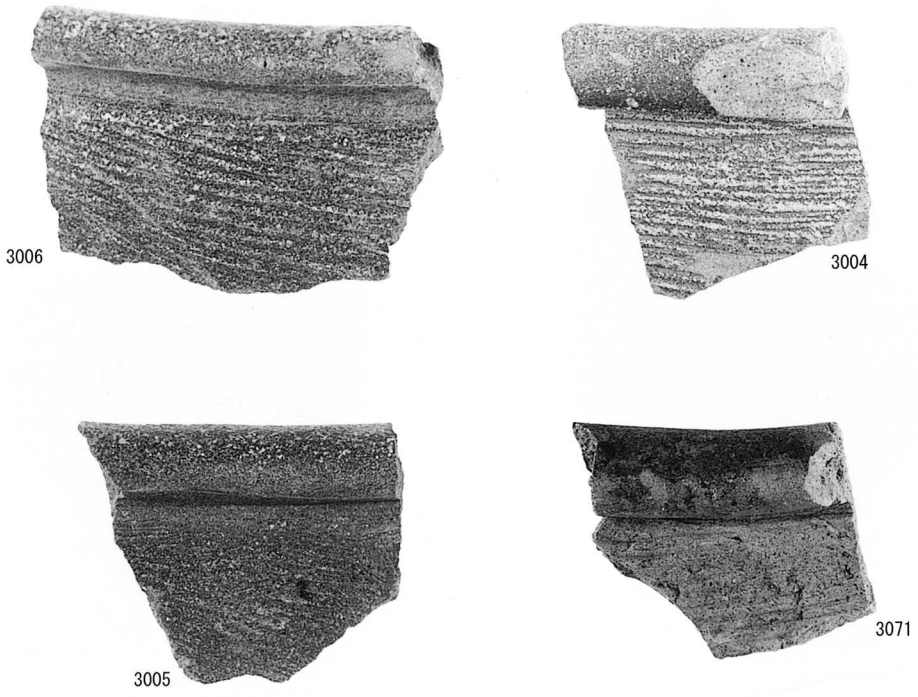
図版 207．14 年度調査区 5 区・河川跡ＳＤ０２（南方より）



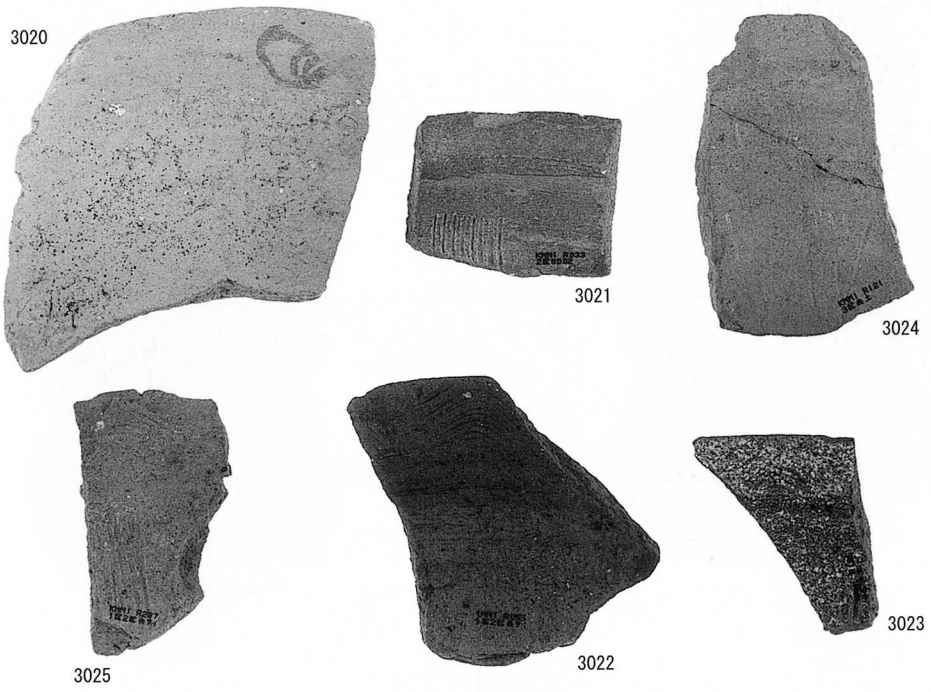
図版 301．平成 13 年度調査区出土 瀬戸



図版 302．平成 13・14 年度調査区出土 陶磁器類



図版 303．平成 13・14 年度調査区出土 珠洲（甕）



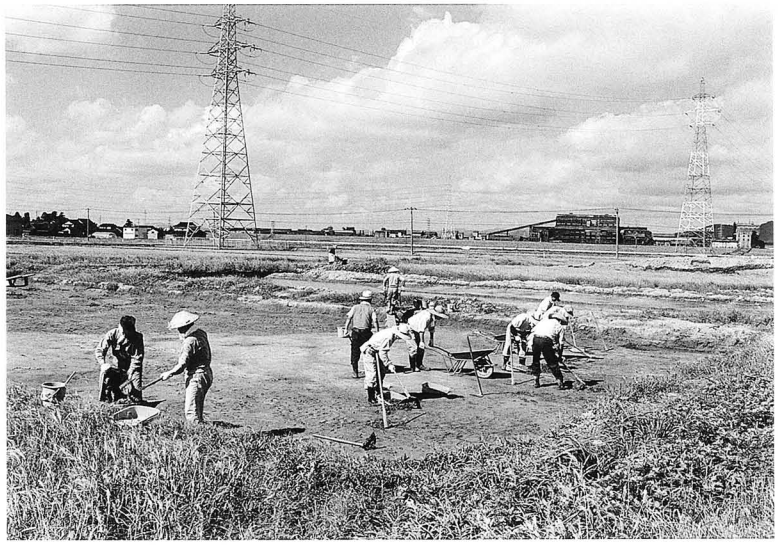
図版 304．平成 13 年度調査区出土 珠洲（すり鉢）

図版 305．平成 13 年度調査区ＳＺ０１出土 石臼

図版 306．平成 13・14 年度調査区出土 性格不明石製品

図版 401．13 年度・調査風景（ＳＺ０１精査）

図版 402．13 年度・調査風景（ＳＸ０６遺物取り上げ）



図版 403．13 年度・調査風景（２区遺構確認）

図版 404．13 年度・調査風景（３区表土剥ぎ）

図版 405．13 年度・遺物出土状況（4001）

図版 406．13 年度・調査風景（ＳＸ０４掘削）

図版 501．14 年度・調査風景（ＳＤ０２掘削）

図版 502．14 年度・遺物物出土状況（4004）

図版 503．14 年度・調査風景（５区各遺構掘削）

報告書抄録

ふりがな	かみまきのみやぶくろいせき　ちょうさがいほう
書名	上牧野宮袋遺跡　調査概報
副書名	平成13･14年度 県道姫野能町線の改良工事にともなう発掘調査
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査概報
シリーズ番号	第60冊
編集者名	根津　明義
編集機関	高岡市教育委員会
所在地	〒933-8601　富山県高岡市広小路7番50号　TEL0766－20－1463
発行年月日	西暦2005年3月25日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上牧野宮袋遺跡 (平成13年度)	富山県 高岡市 上牧野 地内	01602	202118	36° 46′ 2″	137° 3′ 57″	20010729 ～ 20011106	2,310 m²	道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
上牧野宮袋遺跡	集落	中世	掘立柱建物，畝状遺構，配石墓，土坑，溝状遺構	古代土師器，古代須恵器，中世土師器，赤彩土器，灯明皿，瓦質土器，珠洲，青磁，瀬戸，瀬戸美濃，越中瀬戸，唐津，性格不明石製品，砥石，土錘

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上牧野宮袋遺跡 (平成14年度)	富山県 高岡市 上牧野 地内	01602	202118	36° 46′ 6″	137° 3′ 48″	20020520 ～ 20020710	1,000 m²	道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
上牧野宮袋遺跡	集落	中世	土坑，溝状遺構，河川跡	中世土師器，灯明皿，青磁，白磁，珠洲，瀬戸，越中瀬戸，瀬戸美濃，土錘，性格不明石製品

高岡市埋蔵文化財調査概報 第60冊

上牧野宮袋遺跡 調査概報

―― 平成13・14年度 県道姫野能町線の改良工事にともなう発掘調査 ――

発行者　高岡市教育委員会

2005年3月25日　富山県高岡市広小路7番50号

印刷所　平田印刷株式会社

富山県高岡市野村1485番地